

第三章 薬学校・薬業学校時代

第一節 共立富山薬学校

一、創立経過

明治六年売薬界の非常時にあたって、「舎蜜学校」の設立を請願してから二十年、ようやく具体化の機がやってきた。時に明治二十六年五月十九日（一八九三）八清楼で設立発起人会が開かれ、七月設立の協議がまとまった。八月三日私立薬学校設置の認可がくだり、共立富山薬学校と称することとし、創立事務所を広貫堂において準備を開始した。

注…共立富山薬学校の敷地百七十五・六一坪は明治二十六年五月三日、広貫堂社長郷沢金広によって買収されている。おそらく学校建設の準備であったかと思われる。

場所は富山市梅沢町広貫堂の向い側に百七十六坪の敷地をもとめ、約二十坪の校舎を新築することになり、建物および敷地に千円、器械に五百円支出することに決定した。創立経費は、富山市の補助金三百円の外、広貫堂、師天堂、富山薬剂会社、保寿堂、弘明堂、精寿堂等、多数有志の寄附金によってまかなわれた。

注…薬学校を設立した人々の名が、各種資料に種々記されているが、明治初年以來の記録に見られるように、売薬業者、薬種業者、薬剤師会員等の熱心なる協力と、東京帝国大学教授陣のつよい勧めによって設立に至ったとみるのが適当と思わ

れる。

各資料を総合すると、左の人々の名が、代表として創立史の中に見受けられる。

売薬会社 広貫堂、師天堂、富山薬劑会社、保寿堂、弘明堂、精寿堂

売薬業者 卯沢金広、阿部初太郎、松井伊平、密田林蔵、田中清次郎、日南田宇八郎、沢田金太郎、金井久

兵衛、志波久次郎、石井義春

富山県薬劑師会役員

会頭 中田清兵衛、副会頭 横江清次郎、

幹事 桜井勘六、日野五七郎、大久保秀民、福島猪太郎、中村

米次郎

東京帝国大学教授、下山順一郎、丹波敬三、助教授丹羽藤吉郎

開校は明治二十七年一月二十日の予定——新聞広告にみえる——がたてら

れていたが、工事が遅れ一月末小さいが大変美しい新館が落成した。

本館の階上は講堂、応接室、階下は事務、教員、薬品、小使の各室に

あて、本館に続いた平家には、普通教室、製煉、天秤、蒸留、分析、調

剤、衛生、裁判の各室があてられていた。

そして、同月二十七日、学校維持のため次の役員を選んだ。

校 長 卯沢金広

会計監督 中田清兵衛

廣 告

本校ハ明治廿七年一月廿日ヨリ事業開始メ候旨廣告致置候處ニ付來ル二月一日ヨリ授業開始ス

但シ入學申込期日ハ本月廿五日迄延期ス

本科 藥劑師養成授業時間ハ毎日午後一時ヨリ五時マデ分科授業目ノ内二科以下は授業分科地留習ノ學科ヲ撰選セレン

撰科 午後一時ヨリ四時マデ内植物學ハ午後六時ヨリ九時マデ内物理學ハ午後六時ヨリ九時マデ内化學ハ午後六時ヨリ九時マデ内物理學ハ午後六時ヨリ九時マデ内化學ハ午後六時ヨリ九時マデ

速成科 富山県立富山藥學校

富山県立富山藥學校

追テ規則書ハ廣貫堂内本校事務所ヘ郵送ニ候御座ヘ申ス

共立富山藥學校生徒募集新聞廣告（明治27年1月）

監督 横江清次郎、志波久次郎、関野善次郎

評議員 密田林蔵、阿部初太郎、松井伊平、金井久兵衛、寺田久

蔵、桑田安次郎、佐伯権三郎、中田太七郎、日南田宇八

郎、桜井勘六

幹事 日南田宇八郎

開校式は二月一日に行なわれた。入学生は本科生二十五名、速成科生十五名で、教員には次の四氏が依頼された。

講師 桜井 勘六（本科…化学・植物学、速成科…化学）

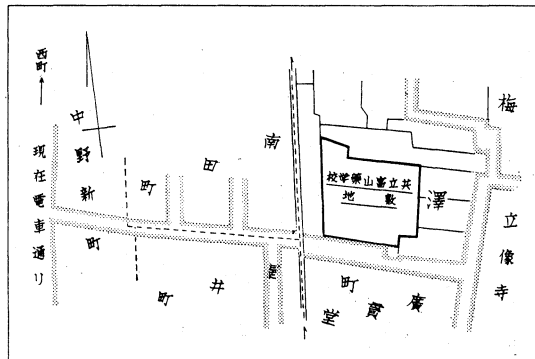
日野五七郎（速成科…植物学・物理学）

嘱託 田村輔三郎（本科…物理学）

佐多 愛彦（本科…独逸語）

右講師の内、田村輔三郎は富山県師範学校、佐多愛彦は富山病院の職員であった。

また桜井勘六は明治十六年東京大学製薬学科別科に学び、明治十九年春卒業、引きつづき東京帝国大学に勉学をつづけ、同二十五年富山県技手となった。日野五七郎は明治二十四年私立東京薬学校卒業、明治二十六年東京帝国大学選科を修了し、富山県尋常中学校の助教諭の職にあった。両氏は富山県人として最初に東京大学に薬学を学んだ先覚者であり、富山に新しい西洋の薬学を植えた人でもあった。



共立富山薬学校敷地（明治26年現在）

二、創立記念式

明治二十九年二月一日（一八九六）は、共立富山薬学校の第三回記念日にあたるので、校前には国旗をかかげ緑門^{アーチ}を設け、午前十時から盛大な創立記念式を行なった。

参列者は市川伯孝富山市長、前田則邦、阿部初太郎、宇津善吉等富山市参事会員、金子富山市会議長代理、富山市会議員、中田清兵衛・松井伊平・横江清次郎・金井久兵衛の薬学校監督評議員、広貫堂員、新聞記者、その他市中有志約百五十余名の多数に上った。

式は校長邨沢金広の勅語奉読について、監督志波久次郎が本校の過去の状態から将来を案じての丁寧な意見を反復述べられ、最後に生徒総代若林常太郎の答辞で終った。

それから、職員の案内で来賓一同、生徒のつくった福引室、考え物室、飾物室（植物採取の図）等を巡り、また職員生徒の実験を分析室、化学機械室、物理機械室、顕微鏡室で、見聞し、大いに感動を受けたとのことである。

正午から、祝宴の席を設け、邨沢校長まず開会の趣旨を述べ、さらに講師桜井、武庫川、大久保、岡田の諸氏それぞれ立って、大いに抱負をのべた。酒間また本校の組織について、あるいは売薬拡張のことについて互に胸きんを開いて談話した。午後一時から一般に公開、参観者数百名に達し、実に非常な盛会であったとのことである。

三、卒業式

明治二十七年二月に開校式をあげ、入学生を募集したのであるが、本科生の退学者相つぎ、第二回の応募生十名の内ようやく三名―若林常太郎、島田孫三郎、安田勝太郎―が、第一回卒業の栄冠を得た。時に明治三十年三月十三日で、最初の卒業証書授与式が行なわれた。

校長の告詞

回顧すれば本校の創設は去る明治二十七年にして、じらい本科入学生は三十名の多きに達したりといえども、今日まで卒業者を見ざりしは誠に遺憾に堪えざる次第にてありき。しかしてあるいは病氣その他の事情に依りて休学あるいは退学者多くなりしにかかわらず、在学諸氏の熱心勉強によりて今回第二回の入学者にしてこの好結果を得られたるは祝賀すべきなりとす。しかれども卒業生諸氏はなをかつ今日の位置に安んぜず更に奮励して、是非共内務省の免許を得て独立独歩の位置に立ち、大いに社会の公益を増進せられんことを希望す。終りに臨んで来賓諸君に寒天中特に多忙をもちとわせられず臨式の栄を贈わり本式を盛んならしめられたるを深謝す。

答 辞

本日をはくして本科第一回卒業証書授与式をあげられ諸大賓の貢臨をかたじけなうす生等何の幸栄かこれにまさるものあらんや、顧みれば本校すでに二才余、今この盛典に遭遇するはこれ校長閣下始め講師諸君の優渥なる薰陶によるにあらずんばいずくんぞよくここに至らん、かつまた式に臨んで校長閣下より訓誠を賜う感謝に堪えず。

回顧せば生等本校本科卒業生の卒先にして、挙動校位に關する一層大にして責任いよいよ重し、加うるに薬学は最も蘊奥の精密なる研究と熟練を要しその学識の深淺、技術の優劣、貴宝の人生に及ぼすや喋々弁を待たず。また然るに身を省慮すれば不敏短才いかにして責任を尽すべきかあたかも斧を磨し針を作るに似たり、いわんや前途尙多難の境遇にせまるにおいてをや。しかれども厚恵の教訓を受けいやくも等閑にして任務の一片もつくさざれば豈何の面目かあらん。生等不肖といえども精勵努力し斯学を研究し斯学の暢發を補企し他日恩義の万一に酬ひんとす。ここにいささか蕪言を陳べて答辭となす。

明治三十年三月十三日

共立富山薬学校本科第一回卒業生總代 若 林 常 太 郎 謹 白

つぎに、職員總代武庫川光寧、生徒總代選科長野英之助、市内有志長沢米次郎三氏の祝辭があつて式を終えた。

式後化学実験室で、裁判化学上のミツチェルリッヒ氏の燐檢出法の実験を來賓にみせたが、暗室の実験のため、燐光を放つまでマグネシウムを燃やして燈用に供した。このような実験もそのころでは珍しがられ大変感激をあたえたとのことである。

本日の参列者、桑原師範学長、服部富山中学校長、市川富山市長、大垣助役、関野市會議長、市會議員、市参事會員、神山富山商業学校長、西田高等小学校長、市立病院正副院長、市役所吏員、他有志、新聞記者、旧講師、卒業生父兄、選科・速成科卒業生、広貫堂員、評議員等七十余名。

第二回卒業式は同年九月三〇日行なわれた。卒業生は次の四名（関野英之助、吉田和平、金子清藏、尾谷健太郎）であつた。

四、維持および状況

売薬業の振興のために、業界あげての協力によつた薬学校であつたが、創立早々前途憂慮すべき状態になつた。それはわずか半年もたたない間に、生徒はつぎつぎと退学し、在学者わずかに二十三名となつた。されば薬業家の心痛も大きく、一ケ年を二期にわけて入学生を募集しても、少なくとも五、六名、多くても十名に満たなかつた。先にあげたごとく本科第二回募集生の内三名が、ようやく明治三十年三月に卒業するという状態であつた。このため学校の維持の上に大困難をもたらし、職員にも充分の待遇を与えることもできず、かつ種々の事情の下に交迭ひんばんとなり、生徒の入退学も朝就暮去の状態であつたから、有志の内には、極端に廃校を唱えるものもあつた。あるいは、わずかに十名内外の生徒のために年々千三百余円を支出するよりもよろしく廃校し、相当の補助金を与えて、東京へ、留學生の三十名もだす方がよいのではないかというものさえ、あるという有様であつた。その上、二十七年から三ケ年の経続支出も満期となり、この上、つづけて有志の寄附金を仰ぐこともできないため、薬業有志は大いに熟議をこらした結果、市当局者にはかつてついに三十年十月三十日をもって廃校とし、十一月一日から市に移すこととなつた。

第二節 富山市立富山薬学校

一、移 管 経 過

私立学校として発足した薬学校は、業者の努力にもかかわらず、維持困難なため、売薬業者、薬剤師会ならびに市会議員横江清次郎等によって、富山市および富山市議会に対して、市立移管の運動を行なった。かくて明治三十年五月十九日（一八九七）、富山市会は市立薬学校―公立薬学校の始め―とすることに決定し、十月三十日認可を得て十一月一日、富山市立富山薬学校とした。邨沢校長は十月末で退職し、講師桜井勘六が校長兼教諭に任命された。

これと同時に程度においては従来の本科二年の下に更に予科一ヶ年を増して速成科を廃し、学科を高めて中学程度となす等、諸般の規則を改正し、すべて公立学校制度に準拠した。

翌三十一年三月三日、広貫堂の發起で、大谷派別院において、市内有志者と薬学生徒募集について協議会を開いた。

同年三月八日、薬学校拡張のため、市長より、左記のとおり薬学委員十（？）名を依頼した。

邨沢金広、中田太七郎、日南田宇八郎、村田権次郎、金井久兵衛、山中半蔵、中井久次郎等。

さらに同年五月にいたって、薬業者の市公民中から互選をもって、薬学奨励委員二十名が選挙せられ、奨励委員一名につき入学生二名以上を推薦することにした。

同年十二月九日校長兼教諭桜井勘六が依願退職となり、大阪府立医学校教諭に就任した。同氏は共立富山薬学校創立以来滿五ヶ年間本校の経営と教務とに公私を問わず尽力され、富山における薬学の指導啓発に貢献することはなほ大きなものがあつた。同月二十七日、嘱託講師であつた日野五七郎は富山中学から転じて校長兼教諭に任命された。

翌三十二年四月一日、市立富山薬学校としての第一回の卒業式が挙行せられたが卒業生僅に二名であつた。

二、明治三十二年大火による類焼

創立以来六年、困難ななかにも実験器具機械の整備がなされてきたのであるが、なんとという悪運であつたらうか、明治三十二年八月十二日（一八九九）富山市中野町より出火し本校はそのため類焼のやくにあった。職員生徒等の非常な尽力で、ようやく書籍箱、非常持出簞笥三個、天秤、薬品機械棚一組を運びだし、その他はことごとく焼失してしまつた。（書籍は、共立富山薬学校、富山市立富山薬学校の蔵書印の押されたものが今日まで保存されている）

日野五七郎校長は当日の模様を

「十一日朝まだきより、南方より軟風強風にて夜に入りますます烈しくて人々警戒怠らざりしが、前項のごとき有様にて職員生徒の非常の尽力にてようやく書籍箱、非常持出簞笥三個、天秤、薬品機械棚一組にて、その他悉く烏有に歸した。本校はさる明治二十七年の二月の開校にかかるものにして（有志者設立）、三十年九月市税をもつて経費を支出し、あらためて市立薬学校と称し、学校の建物小なれどもその美麗にして都合善きことは、東京の薬学校のつぎに位するなり。その他書籍、標本、器械等は市税をもつて経費の許す限り年々その完備を計るに怠るなかりしが、今や亡し嗚呼無慘なる哉十二日午前三時に焼失す」と記した。

校舎類焼後は直ちに富山市総曲輪小学校に仮事務所を設け、火災後の始末とともに、九月一日より授業開始の準備にとりかかったが、通常経費千三百円ぐらいで、市も火災の損害がばく大で貧弱な本校にたいし充分な準備をすることができない悲惨な境遇になった。日野校長以下職員等が数回にわたって市役所と交渉した結果

梅沢町円隆寺の堂宇を借り受け、十一日、
かろうじて形許りの授業を開始した。各教
室の境は障子または幕だから隣同志の講義
が漏れる。生徒の机は寺子屋時代のような
長飯台で畳の上にすわり、分析室は暗くて
昼でもランプをともしねばならない。その
上分析製煉の機械に至っては、唯一人分だ
けの備えつけよりなく、一人の試薬を二、
三人で使うという有様であった。このよう
に教室は狭く暗く、器械、標本はなく、金
はなく、教員は少数で二人前働いてもなお
及ばず、実に不完全窮まる授業を施した。
その為に、生徒から不平が起り、学校は市
役所に事情を訴えてもとりあげてくれない
ので、日野校長始め部下職員等は殆んど板
ばさみの姿でその困難なことは、実に言葉
に尽くしがたい有様であった。

この年、東京帝国大学医学部薬学科教授



富山市立富山薬学校卒業記念（明治32年2月）
前列中央は日野五七郎校長

日本薬学会々頭長井長義博士を迎えて盛大な県下薬学大会を開催するため八月十二日準備委員会を開くことになったところ、富山市大火のために、実現の運びに至らなかった。

三、富山市会の廃校決議

明治三十三年三月六日、檜垣知事自ら会長となって、教育諮問会を開催した。同会に出席した日野校長から左記の発言があった。すなわち、氏は富山薬学校の件につき、先ず薬学なるものを説明し、そのますます改良し拡張しなければならぬ理由を述べ、つぎに、「現今この学校の不振なるは主として高等学校薬学科と連絡を欠くにあるが故に、これが課程を高尚にし設備を完全にして適當なる教員を備聘せざるべからず。しかるに富山市の経済は本校の経費を増加せしむることあたわざるをもって県税補助を仰ぐの必要あり。なおかくして適當なる衛生技術者を養成するに至らば、一方において衛生試験所を設置し、県下の衛生事業を発達せしめうべく、また富山市の産物たるのみならず、県下の産物として年額百五十万円の収入ある売薬改良発達についても同校の拡張は最も急務なり」との意をのべ、県税をもって補助すべきものと決定した。

三月十五日(?)富山市が薬学校委員、薬学奨励委員を招集して協議した。出席委員はつぎの諸氏であった。

薬学校委員…横江清次郎・山の中半蔵・古山調次郎

薬学奨励委員…石井義正・中村時政・中川久正

翌十六日、富山市会は、その教育費査定中に、江守議員の動議により市立富山薬学校の廃校を決議した。その理由として

「就家生徒が少なく、かつ大火災の善後策のため数十万円の市公債を起こす場合において、義務教育でない薬学校の経営はもちろん、校舎を新築するようなことは、市の経済の及ばないところである」

この廃校の決議は、全く晴天の霹靂で、薬学校史上の大騒ぎとなったのである。

各新聞はこぞりて廃校の否をとき、学校側は、全国薬学校の状況・統計表ならびに将来薬学の発達するゆえんの材料を調査した参考物を市会議員および有志者に配布し、あるいは、日野校長および二、三の職員は当時の視学官高田種雄を訪問して、現在ならびに将来の薬学教育につき学校存続の必要を強調した。

三月十九日、富山県薬剤師会は、薬学校で臨時会を開き、横江清次郎副会長議長となり、日野五七郎提出の「薬学存立動議」につき討論し、建議案を市参事会、市長、市会議長に提出を決議し、福島猪太郎、高桑定太郎、島田治三郎の三氏を提出者とし存立運動を展開した。

三月二十一日、富山日報紙の社説欄に「薬学校を復興すべし」を載せ、市の反省を促した。

「―各地の薬学校に就てこれを見るに、かの名古屋、熊本のごときは、ただに学期を増加したるのみならず。熊本のごときはその税額わずかに富山市の三分の一五分の一なるに、ますますその規模を拡張して、三十三年度にはさらにその学科を高尚にし、県税より一千円の補助をなし、もって文部省の許可を得んとするに至れり、しかるにわが富山市はただにこれを拡張せざるのみならず、かえって萎縮退歩の挙に出で、ついにこれを廃するに至りたるは、何等の暴挙ぞや。

もちろん従来のごとき設備にては、たとえ同校を卒業するも、進んで高等なる学校に学ぶあたわず、退いて独立の製薬に従うあたわざるをもって、何等の効能なきがごとしといえども、はたしてしからばよろしくこれを革新すべきのみ、これを廃する理由は毫々あるべからず。いやしくも、六万の人口中、その三分の一は売薬業、もしくはこれに関連して生計を営みつつある富山市にして、最も必要なる一薬学校の維持に苦しみ、これを廃止するがごときは、あに富山市の良計な

りと言うを得んや。ゆえに余輩は速かにこれを復興して、もつてますます完全の域に進め、富山特有の売薬と共に、兩々相對して時世の進運に遅れざらんことを、希望してやまざるものなり。」

三月二十一日、市内薬業者ならびに関係有志は、売薬界前途の安気にかかわる大事なことからして各所に集会して善後策を講じ、あるいは檄を四方に飛ばし、長文の薬学校継続設置請願書を市参事会に提出し、また知事を訪問して存立の意見を具陳し、知事の援助を要請した。

三月二十三日、薬剤師大菅昇平、売薬家水上喜平、長沢米次郎、畑亀次郎、村尾定保、金山庄太郎、横山直太郎、広田竹太郎、中田秀太郎、佐藤菊次郎、土田真雄、布上亀太郎、村田藤太郎、中村時正、石井義春、駒宮熊太郎、吉田常次郎、村尾小平、長田金次郎、水野正太郎、久郷米次郎、高島兵次郎等、市内青年薬業家有志五十余名が売薬青年会を組織し、四月五日発会式を挙行した。かくて役員を選び、薬学校存立の運動を展開し、各市会議員を歴訪し、廢校の不条理と復活の必要とを力説して止まなかった。

副会長 高島兵次郎・大菅昇平（会長欠）

幹事 布上亀太郎、水上嘉平、水野正太郎、畑亀次郎、中田秀太郎、久郷米次郎

三月三十日、富山市会は関野議長の下に開会せられ、第七号議案三十三年度予算案歳出部の第三次会に入るや、拾五番（横江清次郎）は緊急動議ありと叫び左のような提案をした。

「さきに薬学校費を否決せしは富山市の狀態より察すればはなだ不穩當の決議と認む、もつとも從來の組織は適当ならざるものあり、本市売薬の慣習として十四、五才に至れば行商見習をなさしむるものなれば薬剤師を養成するの主旨にあらず、ゆえにむしろ当業者の子弟にして尋常小学校卒業位のものを入學せしめ簡易なる薬学の一班を授けもつて富山売薬の改良發達を期するを可とす。はたしてかくのごとくせば生徒も多数を得

べきのみならず、よく実情に適すべし。かつ他市と異なり本市のごとき売薬をもって唯一の産物とせる地においては、その信用上存立の必要ありと信ず。よってその組織方法を改め、さらに発案あらんことを参事会に求めんとす、しかして当業者より右経費のなかへ本年度より二ヶ年間三百円宛を寄付せしむる考えなり」との建議を提出した。ここで議長はこれが採否をはかったところ、いったん否決したことをいまだ数日もたたないのに再び議會自ら提出するようなことは輕卒に失するだけでなく、将来議會決議の信用にも関するとの議論がおり種々討議の結果、結局議長は、慎重に熟考を要すとして後回しとした。

その後、関野善次郎議長と横江清次郎議員（藥劑師会副会長）との間に種々協議をなし、四月二十一日の市会において、横江委員の報告どうり可決され、課目を簡單にした富山市立富山藥業学校の設立となった。

四月二十四日、富山日報の社説に、「藥業学校をして藥学校たらしむるなかれ」をのせて藥業学校の前途を激励した。

同三十三年三月二十八日、市立富山藥学校としての第二回卒業式を挙行したが、卒業生わずかに四名であった。

四、「富山市経営策」よりみたる

富山市と売薬ならびに藥学校

売藥業者が真剣に藥業の發展のために、育成してきた藥学校が創立以来、非常に困難な立場に苦悩してきた。そしてその後にも様々な困難がたちだかっているにもかかわらず、売藥業者等はいくまでもとりくんで

一步も引こうとしなかった。

ここに、当時の富山市民の指導者等が富山売薬をどのように見、かつ富山市の経営の困難をどのように乗りきろうとしていたか、そのため薬学校に対してどのように対処していたか、当時富山市の実業家によってつくられていた富山実業協会の「富山市経営策」をひもといてみよう。

「ながらく富山をささえてきた富山売薬は、維新以前藩主がなしてきたような保護奨励もなく、同時に西洋の医薬が大いに増加してきた結果、昔の盛大をなすことがむづかしくなってきた。ことに明治十五年売薬印紙税規則が發布されてからますます退歩し、毎年七百万円近くの生産をあげていたものが毎年八拾五万円もしくは五拾万円の生産となった。行商人も一万人近くから、五千人ゝ六千人となり、おどろくほど衰えてきた。明治十九年になり、売薬印紙交換規則が發布されてからやや回復したものの、到底今後の発展は望まれないと考えるに至った。

しかし一つの生きる道として、中国、朝鮮等に販路を拡める方法が考えられるが、勇断果決の気性がなければ容易にその目的を達することができない。したがって今後は、工業に重点を置いて進まなければならない」と強調している。

一方富山市の財政はどうであつたらうか。

「―近年中央政府の財政がはなはだしく膨脹したため、すべての財源をとりあげ、各地方の財源が大変枯渇するようになっただけでなく、自治の発達に伴って、地方自営の事業が日に増加し、したがって、歳出に多大の要求をなすようになった結果、地方財政がまた非常に困難を極めてきた。

ことに富山はしばしば、火災、水害に見舞われ、民力は昔のようでなく、商業は衰え（主に売薬をさす）工

業は振わず、したがって、財源の困難ははなはだしく、その上復旧設備のため、歳出の膨脹は大変なものである。したがって、平凡普通的手段ではどうてい市民の進歩発達を期することができないだけでなく、むしろ危急に陥るだけである」と

この解決のため「経営策」は四百三十頁にわたって、政策をのべている。

とくに将来の財政の支出の項でつぎのようにのべている。

「……今日の富山市は社会の進歩に伴うて新設備の疊々たるものと同時に大火災の大瘡痍を被り民力大いに枯渴し、これより以上の負担はもはやたえ難きの傾向あり、これをもって今後数年間は民力養成のために節約的財政をなすべきと同時に、また税法改革を断行してなるべく商工業の発達を害せず、かつ比較的公平なる税法となすの必要あり。しかして本協会の意見としてかの病院を廃止もしくは県立とし、また薬学校を県立もしくは売薬業者の私立に移すとし……」

すなわち、売薬の将来の発展に不安とかつ財政不如意のため、薬業学校を市から除こうと考えた。

一方、教育の項では、一、商業補習学校、一、商業高等教育、一、工芸徒弟学校、一、工業高等教育の必要を強調している点を見のがしてはならない。

今後の売薬業者の売薬振興と薬業学校充実への努力は、このような環境の中でなされてゆくことを見るのが大切である。

第三節 富山県富山市立富山薬業学校

一、維持および状況

市内薬業界に大波乱をまきおこした薬学校の廃校決議は、薬剤師養成を主眼とする薬学校から、売薬業者の養成を主とする薬業学校に転換することでおさまったかのような状況であるが、前節に述べたような状況の改善は、にわかに望みようもなく、多くの問題をあとに残した。

明治三十三年五月二日、県知事の認可を得て、富山県立富山薬業学校(?)と改称し、組織を改めて、修業年限を本科三年、別科二年とし、本科は売薬の子弟に薬学の大意を授け、別科は薬剤師受験科目を授けるを目的とし本科卒業若しくは高等小学校卒業者を入学せしめた。

これよりさき、売薬青年会の副会長大菅昇平は、売薬同志会の勧誘員とともに、市内小学校を卒業せる子弟の父兄に対し、入学勧誘書を配布し、一方市内の旧役場下の分区にしたがい、それぞれ毎戸に、学科の課程その他教養方法等丁寧に説明し、熱心に勧誘した。そのため、五月六日の入学にさいしては、六十八名の多きに達したとのことである。

共立富山薬学校の創立以来、桜井勘六と協力し、さらに薬学校の廃止決議の復活に活躍した日野五七郎校長は、富山薬業学校の校長に任命されたが、大阪府堺市第二中学校へ転任のため退職した。その後任として県立福井病院薬局長であった堀次郎(第四高等中学校医薬部薬学科出身)が新校長として着任した。

明治三十四年三月二十九日、富山市立富山薬業学校第三回卒業式を円隆寺で挙行、卒業生六名であった。

明治三十四年六月一日、市立富山薬業学校と改め(?)七月十日富山市星井町にある富山南部高等小学校の



富山市立富山薬業学校卒業記念（明治35年）
前列中央は堀大次郎校長（星井町の仮校舎）

一部に移転した。

明治三十六年三月三十日仮校舎の雨天
体操場で薬業学校第二回卒業式挙行、卒
業生別科七名、本科三十八名であった。

明治三十六年七月二十日、従来の校舎
では狭くなったので、山王町小学校跡へ
移転した。

明治三十七年三月三十一日、堀大次郎
校長が退任したため、市立富山商業学校
長長野恵太校長が兼任を命ぜられ、翌三
十八年三月兼務をとかれた。同年四月一
日、五番町尋常小学校訓導兼校長稲垣茂
校長心得を命ぜられ、一ヶ月後の四月二
十九日解任、同日、堤從清が校長兼教諭
に任命せられた。

明治三十九年三月市立富山薬業学校の
規則改正のことが、市会で話題となり、
市参事会で審議中のところ、薬業学校を

中等程度とし、売薬業者養成から再び薬剤師養成にきりかえ、さらに研究科をも設けることにしたが、実施を明治四十年とすることにした（市立薬学校と改める考えもあったようであるが明らかでない）

注：薬業学校の校名についての記録は種々あり、決定しがたいものがあるが、一応校印をもとにきめた。

明治三十九年三月二十七日、第五回卒業式挙行、卒業生別科八名、本科十九名であった。

明治四十年三月二十七日、富山市立富山薬業学校最後の第六回卒業式が行なわれた。

式 辞

本日を卜し本校第六回卒業証書授与式を執行し諸彦の貴臨を辱うしたるは大いに光榮とする所なり。

抑も本校創立以来卒業生を出せしこと別科四十八名、本科百三十六名、計百八十四名、今回の卒業生は別科十五名、本科十九名、計三十四名にして時恰も本校を県立に移さるの時に際し、市立学校たる本校最終の卒業生たり。卒業生諸子能く其研鑽したるところにより、前途大いに社会に貢献するを期すべし。然れども薬業界の前途は益々多望なると同時に複雑なる問題に接すること愈々多かるべく、將た薬業の進歩は年を逐うて較著なると共に薬業に従事する者は、修養が益々精深なるべきは贅を待たず、諸子切に茲に留意し毫も其既に研鑽したる所に甘んぜず、今後幾層向上の意気を鼓して我学識経験を進め、以て有為の薬剤師となり、以て有望の薬業家となり能く其品位を高くすることを努む可し。而して市立当時と県立当時との別なく同窓互に相忘れず将来各自の境遇縦ひ参商相距ることあるも、常に切偲の情を存し以て友誼を全うすること亦是れ諸子に切望する所なり、茲に卒業証書授与式に臨み所懷を叙して式辞とす。

明治四十年三月二十七日

二、校舎再築運動

長い苦心のなかから生まれた共立富山薬学校の校舎は日野校長が「建物小なれどもその美麗にして都合善きことは東京薬学校のつぎに位するなり」と述べていたように、よい校舎であつたらしい。写真の一枚でも見つかつたらと残念でたまらない。

この美しい校舎も明治三十二年の大火で焼け、梅沢町の円隆寺の堂宇に仮り住まい、その後三十三年に廢校決議があり、三十四年に星井町の南部高等小学校にうつり、さらに三十六年に山王町小学校跡にと転変した。

この間、校舎の新築に対する薬業界の運動は、活発に行なわれたが、明治四十三年、富山県による建築まで実現に至らなかった。

明治三十三年十一月二日、売薬青年会は円隆寺に役員会を開き、薬業学校々舎建築に関し市長に建議することをきめ、同志会の意見をきいた。

同月六日、売薬同志会は、会合を開き、校舎建築について相談し、売薬青年会とともに市を訪問、建築についての意見を述べ、請願書を市長および参事会に提出した。

同年十一月、富山県薬剤師会は、同会の決議により、校舎新築についての建議書を会頭中田清兵衛、副会頭横江清次郎、幹事総代吉野新兵衛諸氏より市長に提出した。

謹而書を富山市長市川伯孝閣下に奉る。今や文物彬々都鄙学校の設けあらざるはなく。山村僻地咿唔の声を聞かざるなきに至りしは実に国家のために慶賀すべきなり。その然り而して学校は子弟の品性を陶冶し、智識を開発し、技能の熟練

をはかり身体の健康を保たしむべきものなれば、善良なる教師と適當なる器具とを要するは理の当然なりといえども、しかも完全なる校舍なくんば、とうていその目的を達することあたわざるなり。これをもつて富山市災後の経営多端なるにもかかわらず、閣下はまず学校の再築を計画せらる。誠に感謝せざんばあるべからず。しかれどもここに生等の最も愛する富山薬業学校を見るに、いまだその設計を耳にせざるはなんぞや。そもそも同校は当市の富源たる薬業に大関係あるのみならず化学的工業衛生的技術にもまた関係少なかれざれば、その必要あえて他学校に譲らざるを知る。同校現仮舎は最も不完全にして品性上の害毒、教授上の不便はもちろん、採光宜しきを得ず、通風度を失し生徒の健康を害すること大なり。嗚呼閣下は種々なる事情のため同校を顧みること遲滞するなるべしといえども、もし一日これが建築を遅らすれば一日の害あり、数日遅るればその害やまた数倍す。加うるに薬剤師たる生等の業務拡張上に影響を受ける少なからずとせず。伏して願わくはすみやかに富山薬業学校々舎を建築しもつて同校生徒をして完全の授業をうけ身体の保養を全からしめ、かつ市内実業をして益々隆盛の運命に達せしめ、間接に生等薬剤師をして仲臂^ひの機を得られんことを 恐惶再拝

同三十四年一月十日、富山売薬倶楽部は妙国寺事務所にて薬業学校建築等に関する交渉について協議した。

同三十四年四月十二日、売薬青年会第二回定期総会を繰曲輪大谷派本願寺別院に開き、薬業学校々舎建築についての売薬倶楽部の宣言に加入することを決議した。（出席者百三十七名）

同三十四年七月、富山薬業倶楽部所属市会議員の間で、校舎の建築を速成するため委員を選定し、市参事会に交渉することを可決したので委員に選ばれた横江清次郎、日南田宇八郎、若林元四郎、長谷川伊三郎、中谷善次郎等は市長助役と面談交渉を行なった。また七月十日に妙国寺内事務所でこれが交渉委員会を開いた。

同三十四年六月二十七日、富山売薬青年会の役員会を開き、校舎建築速成について協議した。

同三十五年五月、市会において横江清次郎議員の建議を可決し、本年中に再築にきまる。

同三十五年六月十一日、富山市の有志阿部初太郎、大間知円兵衛、若林元四郎、橋本孝、日南田宇八郎、横江清次郎、中谷善次郎の七氏は、富山市役所へ出頭し、薬業学校新築のことについて加藤市長と面談した。（同校は近々新築に着手するとの回答があった由）

同三十五年七月五日、富山売薬青年会は、梅沢町円隆寺に第三回総会（出席者八十六名）を開き、一、薬業校工事費の方へ寄附金の可否（役員会一任）二、薬業校々舎復旧工事の速成を期するため政談演説またはその他の方法をもって当業者を興奮せしむる件（可決）を協議した。

同三十五年、七月七日、富山実業談話会は、南新町清源寺に例会および総会を開き（出席者四百名）富山薬業校建築速成を期する件を売薬青年会と交渉運動することにきめた。

同三十五年八月三日、富山売薬行商会は梅沢町妙国寺に発会式を行ない、（出席者二百余名、發起人佐藤、泉、福田、室川、金盛、太田）「富山薬業学校の完成」を決議した。

同三十五年九月三十日、中田太七郎氏等の発起にかかる富山売薬協会は発会式を行ない（来会者三百五十余名）富山薬業学校の建設速成を期することを決議した。

第四節 富山県立薬業学校

一、移 管 運 動

私立の経営困難の事情から、市立への運動が功を奏し、明治三十年富山市立富山薬学校となった。しかしな

がら、その市も経営に困難を感じ、明治三十三年の教育諮問会における日野五七郎校長の発言にあるように、県税補助が考えられるに至った。さらに不幸なことは、明治三十二年八月十二日の大火による校舎の焼失であった。薬業家が一致して校舎の新築を訴えたが、なかなか実現の運びに至らなかった。（校舎は一時、円隆寺つぎに星井町の南部高等小学校に移り、さらに山王町小学校の跡に移った）したがって、薬業界の世論は、ただいに県立移管に変わっていった。

明治三十四年十月十三日、売薬青年会は、梅沢町妙国寺で役員会を開き、大菅、高畠副会長等二十一名出席して薬業学校を県立となす可否について協議した。

同三十四年六月二十三日、富山市会においては、かねてより市立富山薬業学校を県立となさんとこれが調査委員を設け調査していたが、県立移管の建議書を県へ提出することに決定した。

同三十九年三月、富山市会では、市立富山薬業学校を県立にするため、敷地、校舎およびその他の器械を寄附しようとする機運になってきた。

同年七月三日、富山売薬倶楽部では、理事評議員会を開き薬業学校県立の件を協議し、委員を設けて運動することにきめた。九月三日の役員会では、この委員会を売薬同業組合事務所におき、陳情委員をだすことにした。

同年七月二十四日、富山売薬同業組合では、市立富山薬業学校を県立とするための請願書の調印をまとめるため、本年の始めから邨沢、土田、中川の三役員が郡部各方面に奔走していたがこの日、中田組合長ならびに県下の重なる売薬業者二十四名の連署をもって知事へ請願書を提出した。同年八月十八日、県参事会へも薬業学校県立の請願書を提出。

同年八月十三日、富山売薬倶楽部所属市会議員ならびに理事等十余名県庁におもむき、川上県知事および山村事務官に面会し薬業学校県立の件につき陳情した。

同年十一月十五日、富山県会開設せられ、県内薬業者の多年の念願であつた市立富山薬業学校の県立案が提出せられた。

ここにおいて、富山売薬同業組合、富山売薬倶楽部、売薬青年会、富山青年商工会等は市当局、ならびに県会議員を訪問して活発な運動を展開した。また富山市当局も種々協議し、県立の目的を達するに努力した。

かくて同年十二月十四日、県会において富山市薬業界待望の富山市立富山薬業学校の県立移管が四十年度的ら実施に決定した。

富山薬業時報第四十一号（明治三十九年十一月）に薬業学校県立について左のような社論をにかけて県会の可決をうながしている。

「そもそも県内各都市の薬業者を代表せる諸士がさきに薬業学校県立の事を請願したる当時に声明せるがごとく、古来帝國唯一の薬業地たる富山県にして工芸学校のごとき、はた農学校のごとき実業教育機関の具備せるに似がなく、独り薬業智識を養成するに適當なる教育機関すなわち完全なる薬業学校の設立を見ざりしは遺憾の極にしてこれがために地方薬業の進運遅々たりしはまた掩うべからざる事相にあらずや、しかして時運の進展と共に薬業智識の養成は日に急要を告げ、薬剤師の供給は常にその需要を満たすことあたわざるより、今や政府はますます薬業教育を拡張せんとし、現在医学専門学校の薬学科を分割して新たに薬業専門学校を設立するの議ありと言ひ、あるいは医科大学内の薬学科をさきて別に薬科大学を設立するの議あるやに伝へくる。これみな事宜に適したる施設にしてかの年来の宿願たる医薬分業の期に接するもまた遠きにあらざるが故に、もしたして現在医学専門学校の薬学科を分割し、薬学専門学校の設立を見るに至るも、

なおかつ前途薬剤師の不足を感じるは歟々を待たず。とくに富山県のごときはその薬業地たると同時に薬剤師の需要最も大なること何人も確認するところなれば、今日において完全なる薬業学校を設立するはまことに急務にして今回の提案理由に薬業の拡張をたすけ薬剤師養成を急要とするゆえんを言明せるはまた少しの異議をいれるの余地なき者と言ふべし。もしそれ戦後各般の経営に急にして刻下いづれの地方も実業振作に全力を傾注しもって国家の富強に貢献し、地方の福利を増進せんと企図せるにかかわらず、不幸にも富山地方の実業教育その歩を進むるによしなく、古来唯一の薬業地方と称揚せられながら、その教育機関の完全ならざるがために前途かえつて他の地方の薬業のあとに踵着たるがごときはただに地方の体面を損すること大なるのみならず、結局地方の重要物産をして悲境に沈淪せしめ、地方の富源を減ずるに至るも昭々として明かなり。しかして本年三月の富山市会もまた薬業学校の県立を希望し、市立薬業学校の敷地建物器具等の全部を寄附して県立学校とせられんことを県当局に建議したり。これまた吾人と同じく地方薬業界の大勢を査察し薬業教育の振作によりて国家の富強に貢献し、地方の福利を増進せんことを企図せるものに外ならざるなり。せつに望む富山県会の明よくここに留意しひとえに地方薬業の情形にかんがみ薬業教育の重きを体して敏速県立案を可決せられんことを。」

二、創 立

明治三十九年十二月十四日に可決せられた富山県立薬業学校の校舎建築および敷地買収費として、富山市から壹万二千元（三ヶ年賦）を寄附することになり、内半額六千元は売薬業者の寄附によることになった。

県会に提出された経常予算は

総額 六千元

内訳 俸給四千六十円（校長給千円、教員月俸四十円六人、書記月俸十五円一人）。雑給四百八十円、

校費千七百七十五円。退職賜金四十円、国庫納金四十円、修繕費二百円。

かくて同四十年三月二十八日（一九〇七）づけをもって各種学校として認可され、四月一日、富山県告示第四号をもって富山県立薬業学校設置の件布告せられた。同日富山県令第二十八号をもって校則を定め、修業年限本科三年とし、薬剤事業に従事する者を養成し、予科卒業者、もしくはこれと同等以上の学力あるものを入学せしめることとした。予科は二年とし、高等小学校二年修了者に薬学大意を修得させ、もしくは本科に入るの素養を得させることにした。

四月一日には、県事務官山村弁之助校長事務取扱を命ぜられ、二十五日開校式をあげた。

十月二十六日には、山村事務官校長事務取扱を免ぜられ、従五位勲四等製薬士中西司馬校長兼教諭に任ぜられた。同氏は東京大学製薬学科第四回（明治十四年）卒業生であった。

中西校長は着任以来学校の設備教授法等につき熱心に研究せられ、また鋭意薬業の発展に留意し、県当局、あるいは実業家と意見を交換し献策せられることもしばしばであった。さらに、学校には精巧な顕微鏡四台、化学天秤一台を増加し、その他大いに設備の充実に尽力された。また、各種学校として、出発した学校を実業学校の組織に変更する方がよいか、また進んで専門学校にした方がよいか、についても職員と協議を重ね、また、県当局、文部当局、東京帝国大学薬学科の教授とも絶えず打合せを行なった。

三、開 校 式

明治四十年四月二十五日、山王町の仮校舎で、薬業界待望の富山県立薬業学校開校の式があげられた。県知

事をはじめ多数の来賓、業界関係者の来会があつて盛大に行なわれた。また午後には、富山ホテルで富山県売薬同業組合主催の祝賀会が開かれた。開校式の来賓の外、金岡代議士、寺島、正木、松島各県会議員、牧野市会議長、横山政友会支部幹事、富山公同会幹事および青年商工会、各薬業団体代表ならびに薬業学校職員等、百有余名の多数の出席で、たがいに祝意がかわされたが、とくに売薬業者の喜びは格別であつたことであらう。

第五節 組織と維持

一、校 則

共立富山薬学校々則

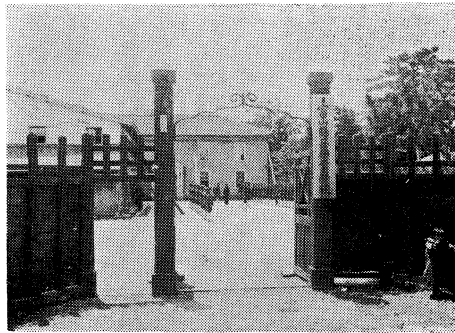
第一章 総 則

第一条 本校ハ薬学ヲ教授シ、薬剤師ヲ養成スルヲ以テ目的トス、尚撰科及速成科ヲ置キ斯学志望者ノ便ヲ計ル

第二章 学年及学科課程

第二条 学課ノ分類及程度左ノ如シ

本科ハ薬剤師タルベキ学力養成ヲ以テ主眼トス



富山県立薬業学校正門

撰科ハ本科課程中ニ於テ学徒ノ選択ニヨリ、二科目以下教授ス

速成科ハ薬学ノ大意ヲ知ラシムルニ在リ、但、授業ハ当分夜中

第三条

本科学年ヲ二ヶ年トシ、之ヲ四学期分ニ分チ、撰科ハ半ヶ年一学期、速成科ハ一ヶ年四学期トス

第四条

学科課程左ノ如シ

本科 学科課程

第一学期 無機化学、植物学、物理学、独逸語学

第二学期 有機化学、製薬化学、調剤学及実地演習、分析化学（定性分析実地演習）独逸語学

第三学期 生薬学、衛生化学、裁判化学、調剤実地演習、分析化学（定量分析実地演習）

第四学期 衛生化学、裁判化学、日本薬局方使用法、製薬化学実地演習

選科 学科課程

本科学課程中二課程以下教授シ、裁判化学、衛生化学、調剤学実地演習ハ特ニ一学期内ニ於テ教授ス

速成科 学科課程

第一学期 無機及有機化学、物理学、植物学

第二学期 生薬学、製薬化学、調剤学

第三学期 同上

第四学期 同上

第五条

学期々日ハ左ノ如シ

冬学期 自一月十一日 至六月三十日

夏学期 自七月一日 至十二月二十四日

第六条 休業期日ハ左ノ如シ

夏期休業 自七月二十日 至八月二十日

冬期休業 自十二月二十五日 至翌一月十日

日曜日、大祭祝日、本校記念日（二月一日）

第三章 入学及退学

第七条 入学ハ冬及夏学期ノ始メニ於テ許可ス、但、時宜ニヨリ臨時入学ヲ許ス事アルベシ

第八条 本校ハ左ノ資格ニ適スル者ニ限り入学ヲ許可ス

本科 年令満十七才以上ノ男女子 品行端正、身体強健

高等小学校卒業ノ者又ハ之ト同等ノ学力ヲ有スル者

撰科 年令満十七才以上ノ男女子 品行端正、身体強健、築学ノ大意ヲ修メタモノ

速成科 年令満十五才以上ノ男女子 身体強健、略々算術ニ通曉シ且筆記ニ差支ナキ者

第九条 入学志願者ハ左ノ書式（略）ニ準シ、入学願書及履歷書ヲ差出スベシ

第十条 保証人ハ丁年以上ノ男子ニシテ富山市内ニ居住スル者ニ限ル

第十一条 入学許可ノ者ニハ本校生徒タルコトヲ証明スル為ニ在学証ヲ附与ス。生徒登校ノ時ハ必ず本証ヲ携帯シ臨時点検

ノ節之ヲ示スベシ

第十二条 保証人ヲ變更スルカ又ハ本人及保証人転居若クハ改印等ノ節ハ其都度届出ツベシ

第十三条 生徒疾病事故ニテ休課シタル時ハ其翌日マデ保証人ヨリ届出ツベシ

第十四条 生徒退学セント欲スル時ハ保証人連署ヲ以テ願出テ在学証ヲ返納スベシ

第四章 試 業

第十五条 修業試問ハ各学期ノ終ニ於テ其学期ノ学科目ニ就キ試問シ、卒業試問ハ全学期間ノ学科目ヲ試問ス

第十六条 修業及卒業試問共学科目評点百点ヲ以テ満点トナシ、一課五十点以上又ハ一課四十点以上ニシテ全学課平均点七十点以上ヲ修業者又卒業者トナス

第十七条 修業試問ヲ完了シタル者ハ次学期へ進級セシメ、卒業試問ヲ完了シタルモノハ卒業証書ヲ与ヘテ之ヲ証ス

第十八条 生徒授業料ハ毎月五日限り分納スベシ

本科 一ケ年 金十二円

選科 半ケ年 金六円

速成科 一ケ年 金三円六十銭

第十九条 本科二学期以上及撰科実地演習学課ヲ履習スル者ハ教場費トシテ一カ月分金二十銭ヲ其月五日限り前納スベシ
第二十条 半途退学者ハ其月マデノ授業料及教場費ヲ徴収ス。又退学者ト雖モ在学証ヲ返納セザル間ハ授業料及教場費ヲ徴収ス

第二十一条 実地試験ニ要スル藥品ハ之ヲ給与スト雖モ、酒精、依的爾、硝酸銀等其他高価ノ藥品ハ生徒ノ自弁トス

第二十二条 実地試験ニ要スル器械ハ之ヲ貸与スト雖モ試験管、濾紙等ハ生徒ノ自弁トス

第二十三条 貸与シタル器械ヲ破損シタルトキハ原品ヲ以テ弁償セシム

第二十四条 本校々則ニ違反シ、又ハ時々ノ揭示ヲ遵守セス或ハ不品行等ニシテ卒業ノ見込ナキ者ハ退学セシム

二、養成目的と科別制

薬学校創立にあたっては、薬剤師の養成を主眼とし、売薬業者の養成をつぎにおいたのであるが、学校当局

ならびに売薬業者の勧誘にかかわらず、修学状況はあまり芳しくなかった。それで、明治三十三年度から名を薬業学校と改め、売薬家の子弟の養成を主に変更した。しかし時代は進展し、いつまでも低い薬業学校にとどめることができなくなり、ついに、中等学校程度の県立薬業学校（実業学校令によらない諸学校として）となり、さらに数年にして薬学専門学校に進展した。

しかし、ここまでいたる間に二つの問題がよこたわり、いわゆるいずれが先きか、後かの——高度な薬剤師の養成と売薬行商人養成の——問題が、いりまざって、問題を複雑化してきた。そしてそれは専門学校が完成してから、再び、薬業学校設立の問題となつてあらわれた。

このことが明治二十七年共立富山薬学校設立と同時に一つの問題となつてあらわれた。

すなわち、四月早々、第四高等学校の大島誠治と桜井勘六の両氏との間に相方の連絡について話しあいがあった。

こえて七月十五日、共立富山薬学校幹事日南田宇八郎、講師桜井勘六の両氏は金沢第四高等学校医薬部薬学科主事桜井小平太教授を訪問し、富山薬学校本科卒業生が無試験にて相当の学級へ編入できるよう依頼した。さらに桜井主事の紹介により大島校長にも面会し、かさねて依頼した。大島校長は連絡のことは賛成だが、無試験入学には問題があり、その入学資格をつくるのが大切だと言う返事をした。したがって、本校はなるべく尋常中学校三学年卒業生を募集するように努力することになった。しかし、ついに実行にいたらなかった。

養成目的と科別制の移りかわり

| | 薬剤師養成 | 売薬行商人養成 | 〔予科〕 | 〔選科〕 |
|--|--|---|--|--|
| <p>共立富山薬学校 明治 二七</p> <p>富山県立富山薬学校 四〇</p> | <p>〔本科〕 年限を二ケ年とし四学期にわたる 年令十七才以上、高小卒、中学二年修了又はこれと同等のもの</p> | <p>〔速成科〕（薬学の大意） 年限を一ケ年とし四学期にわたる 年令十五才以上算術に通じ、かつ筆記に差支えなきもの 年限六ヶ月とし、二学期にわけ、年令十三才以上小学校卒業及び同等の学力を有するもの</p> <p>当 分 休 止</p> | <p>〔予科〕 年限一ケ年の予科をおく （高小四年の課程をおさめ又は年令十四才以上、同等の学力を有するもの）</p> | <p>〔選科〕 本科課程中二課目以下 選修 年令十七才以上、薬学の大意を修めたもの</p> <p>〔研究科〕 実 施 延 期 一課目、半ケ年を一期とする</p> |
| <p>富山県立富山薬学校 三九</p> | <p>〔本科〕 三年 予科卒業もしくはこれと同等以上の学力のあるもの</p> | <p>〔別科〕 年限を二ケ年とする</p> | <p>年限を二ケ年とする （高小二年修了者）</p> | <p>〔研究科〕 実 施 延 期</p> |
| <p>富山県立富山薬学校 三八</p> | <p>〔本科〕 年限を二ケ年とし、本科出身者又は高小卒業生 年限を一ケ年とする</p> | <p>〔本科〕 年限を三ケ年とし、尋小卒業以上のもの 年限を二ケ年とする</p> | <p>年限を三ケ年とする</p> | |
| <p>富山県立富山薬学校 三五</p> | <p>〔本科〕 年限を二ケ年とする</p> | <p>〔別科〕 年限を二ケ年とする</p> | | |
| <p>富山県立富山薬学校 三三</p> | <p>〔別科〕 年限を二ケ年とし、本科出身者又は高小卒業生 年限を一ケ年とする</p> | <p>〔本科〕 年限を三ケ年とし、尋小卒業以上のもの 年限を二ケ年とする</p> | <p>〔予科〕 年限一ケ年の予科をおく （高小四年の課程をおさめ又は年令十四才以上、同等の学力を有するもの）</p> | <p>〔選科〕 本科課程中二課目以下 選修 年令十七才以上、薬学の大意を修めたもの</p> |
| <p>富山県立富山薬学校 三〇</p> | <p>〔本科〕 年限を二ケ年とし四学期にわたる 年令十七才以上、高小卒、中学二年修了又はこれと同等のもの</p> | <p>〔速成科〕（薬学の大意） 年限を一ケ年とし四学期にわたる 年令十五才以上算術に通じ、かつ筆記に差支えなきもの 年限六ヶ月とし、二学期にわけ、年令十三才以上小学校卒業及び同等の学力を有するもの</p> <p>当 分 休 止</p> | <p>〔予科〕 年限一ケ年の予科をおく （高小四年の課程をおさめ又は年令十四才以上、同等の学力を有するもの）</p> | <p>〔選科〕 本科課程中二課目以下 選修 年令十七才以上、薬学の大意を修めたもの</p> |
| <p>富山県立富山薬学校 三一</p> | <p>〔本科〕 年限を二ケ年とし四学期にわたる 年令十七才以上、高小卒、中学二年修了又はこれと同等のもの</p> | <p>〔速成科〕（薬学の大意） 年限を一ケ年とし四学期にわたる 年令十五才以上算術に通じ、かつ筆記に差支えなきもの 年限六ヶ月とし、二学期にわけ、年令十三才以上小学校卒業及び同等の学力を有するもの</p> <p>当 分 休 止</p> | <p>〔予科〕 年限一ケ年の予科をおく （高小四年の課程をおさめ又は年令十四才以上、同等の学力を有するもの）</p> | <p>〔選科〕 本科課程中二課目以下 選修 年令十七才以上、薬学の大意を修めたもの</p> |

三、職

員

すべて創始期には困難はつきものであるが、他国と隔離された交通に不便な地、富山に良き教師を得ることは、なかなか困難であつたろう。その上に私立時代はもちろん、市立時代の待遇の悪さ、ながく教職についてもうことができなかったのも止むを得ないことであつた。

ただ初期において、郷土に桜井勘六（水橋町の出身で、明治十六年上京し、東京大学薬学科の別科製薬学生として学び、明治十九年卒業、引きつづき、薬学科の職員として研究し、明治二十五年、県技手として故郷に帰る。）、日野五七郎（富山市新庄町の出身で、明治二十二年上京、下山博士を訪問し、私立東京薬学校を明治二十四年卒業、明治二十六年帝国大学医学部薬学科選科を終え、故郷に帰り、富山尋常中学校の博物科教師となる。）、武庫川光寧（富山市山王町の出身で、第四高等学校医薬部薬学科を明治二十七年十一月卒業。）

右の薬学専攻者三人を講師として得たことは、何にも増して幸いなことであつた。しかも同氏等はあらゆる困難にたえて創業にあたり、富山薬学の礎をつくったことは特筆大書すべきことである。しかるに、同氏等がながく学校に止まることができなかったことは、何に原因したか、あれこれと思ひめぐらすだけである。

つぎに記録が充分でなく不明確な面もあるが、とにかくにも、薬学校、薬業学校を維持しつづけてきた教職員の名をとどめたい。

その前に各年に在勤した教職員の数を記す。（兼任も含めて）

共立富山薬学校
 富山市立
 富山薬学校
 富山市立富山薬業学校
 富山県立
 薬業学校
 年号 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42
 人数 5 7 5 3 3 4 4 4 6 7 7 3 7 11 9 10

共立富山薬学校創立から富山県立薬業学校時代の職員

職員表 (明治二十七年から明治四十二年まで)

| 姓 名 | 職 名 | 就 職 年 | 経 歴 |
|-------------|-----|---------|---------------------------|
| ○ 邨 沢 金 広 | 校 長 | 明治二七—三〇 | 広貫堂社長 |
| ○ 桜 井 勘 六 | 校 長 | 同 二七—三一 | 東京大学別科製薬学生 (明治十九年卒) |
| ○ 日 野 五 七 郎 | 校 長 | 同 二七—三三 | 東京帝国大学医学部薬学科選科 (明治二十六年卒) |
| ○ 田 村 輔 三 郎 | 講 師 | 同 二七 | 私立東京薬学校 (明治二十四年卒) |
| ○ 佐 多 愛 彦 | 〃 | 同 二七 | |
| ○ 武 庫 川 光 寧 | 〃 | 同 二八—三〇 | 第四高等学校医学部薬学科 (明治二十七年十一月卒) |
| ○ 谷 井 寮 太 郎 | 〃 | 同 二八 | 薬剤師 |
| ○ 岡 田 亀 蔵 | 〃 | 同 二九 | 薬剤師 |
| ○ 大 久 保 秀 民 | 〃 | 同 二九 | 薬剤師 |
| ○ 稲 本 保 太 郎 | 〃 | 同 二九—三五 | |

| | | | | | | | | | |
|--------------------|--------|--------|--------|-----------|--------|--------|------|-------|-------|
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 稻垣重賢 | 岩城栄次郎 | 堀大次郎 | 中根勉温 | 前田九郎 | 高木保太郎 | 岡村茂平 | 佐伯外治 | 奥津銀平 | 井上源太郎 |
| 藤井義雄 | 金村清蔵 | 長野恵太 | 中林武夫 | 館村(日野)五三郎 | 亀谷源三郎 | 小綱仁三郎 | 稻垣茂 | 田中権太郎 | |
| 書記兼教授嘱託 | 教授諭 | 兼任校長 | 教授諭 | 教授諭 | 教授諭 | 書記兼教授諭 | 教授諭 | 教授諭 | 教授諭 |
| 同三六 | 同三六—三八 | 同三七—三八 | 同三七—三八 | 同三七—三八 | 同三七—三八 | 同三七—三八 | 同三八 | 同三八 | 同三八 |
| 兼富山商業學校校長 | | | | | | | | | |
| 私立東京薬学校(明治三十二) | | | | | | | | | |
| 兼富山市立五番町小学校校長 | | | | | | | | | |
| 富山市立富山薬学校卒(明治三十三?) | | | | | | | | | |
| 第四高等中学校医学科卒(明治二十五) | | | | | | | | | |
| 富山市立富山薬学校卒(明治三十四?) | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|----------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|-----------|---------|-------------------|-------|-------------------|---------|--------------------|-------|---------|
| ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | | | |
| 堤 從 清 | 金盛滋次郎 | 今井義直 | 南日彙三郎 | 龜谷芳之助 | 土田勇義 | 藤坂友次郎 | 金谷秀男 | 金村清蔵 | 久保田宇市 | 柳 榮太郎 | 山村弁之助 | 日野五七郎 | 石井則義 | 松田三郎 | 中西司馬 | 数見宗一郎 | 山 本 繁 | 今 野 秀 輔 |
| 校 長 | 助 教 諭 | 助 教 諭 | 書 教 諭 | 教 諭(兼) | 助 教 諭 | 教 諭 | 教 諭 | 助 教 諭 | 助 教 諭 | 兼 助 書 教 諭 | 兼 任 校 長 | 教 諭 | 書 教 諭 | 助 教 諭 | 校 長 | 教 諭 | | 教 諭 |
| 明治三八―四三 | 同 三八―四〇 | 同 三八―四〇 | 同 三八―三九 | 同 三八―四〇 | 同 三八―四〇 | 同 三八―三九 | 同 三八―三九 | 同 三六―三八 | 同 三八―三九 | 同 三九―四〇 | 同 四〇 | 同 四〇―四三 | | 同 四〇 | 同 四〇―四三 | 同 四〇―四一 | 同 四〇 | 同 四一 |
| 石川県甲種医学校 | 富山市立薬学校(明治三四年) | | | | | | | | | | | 金沢医学専門学校薬学科(明治三八) | | 金沢医学専門学校薬学科(明治三八) | | 東京大学医学部製薬学科(明治一四年) | | 東京外国語学校 |
| | | | | | | | | | | | 県事務官 | 前 出 | | | | | | |

| | | | | | | |
|-----|-----|--------------------|-------------|----|------|--------|
| 同 | 教 務 | 東京帝国大学 医科大学薬学撰科 | 生薬学、薬用植物学 | 一五 | 五拾貳円 | 日野五七郎 |
| 同 | 図 書 | 私立東京専門学校 | 国語、歴史、修身、地理 | 一三 | 四拾円 | 川田以一 |
| 同 | 薬 品 | 私立東京薬学校 | 化学、分析化学 | 二〇 | 同 | 清水駒造 |
| 同 | 独 語 | 東京外国語学校 | 独逸語学 | 一四 | 参拾円 | 今野秀輔 |
| 同 | 同 | 東京順天求合社数 学科 | 数学、物理 | 一一 | 同 | 内山幾太郎 |
| 同 | 同 | 富山県中学校 | 博物学 | 九 | 貳拾円 | 稲田衆次郎 |
| 助教諭 | 消耗品 | | | 拾七 | 円 | 石井則義 |
| 書 記 | 會 計 | | | 八 | 拾五円 | 小柴梅次郎 |
| 兼教諭 | 授 課 | 私立東京薬学校 | 体操科 | 拾 | 円 | 高津武治 |
| 同 | 同 | 同 | 製薬化学、衛生化学 | 二七 | 円 | 長沢安太郎 |
| 校 医 | 校 医 | 第四高等学校医学部 | 同 画 | 三 | 円 | 高田 範 国 |

四、職 務 分 掌

共立富山薬学校当初は、校長、会計監督、監督、評議員、幹事と、それぞれ創立に従事した人々が、運営に
 当り、創立事務所を広貫堂内において出発したが、細かい校務は、桜井勘六、日野五七郎両講師が苦心慘怛さ
 れたようである。

市立薬学校または薬業学校になってからは、書記が任命されて事務的な面が担当されたが、他の職務分掌は
 不明確である。明治四十年県立薬業学校になって初めて、分掌が明確にされたようである。

すなわち、

庶務掛・堤從清教諭、會計掛・石井則義書記、教務掛・日野五七郎教諭、図書掛・川田以一、器械および器具掛（藥品係・清水駒造、消耗品係・稲田桑次郎）

五、生徒―募集・入学・在学・卒業

学校経営の困難さの一つは、生徒の入学者が少なすぎることに、さらに入学したものも、途中で退学するものが多いことであった。これでは、財政的に苦しんだ富山市が廢校決議する理由もうなづけるものがある。しかし理解ある売薬業者は、この困難にもまけず、あらゆる手をつくした。

明治三十一年、富山市は薬学校委員を任命して振興について協議し、また薬学校奨励委員を委嘱して入学を勧誘した。

同年三月三日広貫堂発起のもとに大谷派別院において、薬学校生徒募集のことについて市内有志者と協議を上げた。

同年五月、富山薬業会から新入生に制帽並びに徽章をおくった。

同年四月一日、市内薬種業組合より市立薬学校へ選拔生として六名入学せしめた。

同三十二年三月、富山薬学会の寄附金でもって、優等生に、書籍、藥品、帽子等を給与し、また授業料免除の特典を与えた。免除者十五名の多きになったとのことである。

同三十三年、富山市長から、本科修学生十一名内三名にオストワルドの化学原理一部、予科修学生四名中一

名に、実験化学一部宛授与した。

同三十三年五月、売薬青年会員は売薬同志会の勧誘員と各家庭をまわり、印刷物を配布して、勧誘をすすめた結果、入学者が、六十八名に達し、仮校舎は狭くなったとのこと。

同三十四年四月、売薬青年会から学業奨励のため、新入生六十余名に教科書、石盤、徽章等を分与した。

同三十五年三月、売薬青年会から新入生七十余名に教科書を寄贈した。

同三十六年四月、新入生（別科四十名、本科四十五名）八十五名に、売薬青年会から教科書一部宛寄贈した。

同四十年二月、富山薬業時報はその社論に「薬業家の子弟」と題し、売薬振興のために入学を勧奨した。

同四十年四月二日、富山売薬俱樂部では売薬業者の子弟を入学せしめるため協議会を開き、勧誘委員を設けた。

明治四十一年三月、富山売薬俱樂部の幹事連が市内の高等小学校に至り、それぞれ調査し、在市中の当業者だけで入学者の勧誘方法を講じた。

生徒在籍数

| | | | | | |
|--------|-----|--------|------|--------|------|
| 明治二十七年 | 四〇名 | 明治三十三年 | 七八名 | 明治三十九年 | 六九名 |
| 同 二十八年 | 三九名 | 同 三十四年 | 九九名 | 同 四十年 | 八九名 |
| 同 二十九年 | 四三名 | 同 三十五年 | 一四〇名 | 同 四十一年 | 三八名 |
| 同 三十年 | 八名 | 同 三十六年 | 一四二名 | 同 四十二年 | 一一八名 |
| 同 三十一年 | 二九名 | 同 三十七年 | 一二七名 | | |
| 同 三十二年 | 二五名 | 同 三十八年 | 八二名 | | |

六、校舎

類焼後の再建問題は、解決がつかないままに、県立移管の問題とかわり、明治三十九年の県会で、県立移管に決定した。

同四十年四月富山県立薬業学校として開校、同年の秋の県会で、県当局から土地買収費を予算に計上した。県当局はつぎのような提案をだした。

「義務教育の延長、師範の増員、中学の増加、高等女学校、実業学校に対しては、朝野の世論にかんがみ、全力をあげて整理整とんしてゆかねばならない場合になっている。——有名な薬業に対しては県立薬業学校を設けて、今やこれが発達をはかっている。将来薬業学校を建築せねばならぬがこれも財政の都合を見て徐々に改良拡張してゆきたいと考えているので、数年の間に完成したい——かくて土地買収費を提案」した。

しかも、富山市から寄附金の申入れがなされていたのに、教育費が県費の六分の一をしめており、実業教育（薬業、蚕業、商業、水産業）の充実は、財政を圧迫するとの理由で、県会はこれを否決した。

翌四十一年の県会において、宇佐見知事は薬業学校建築についてつぎのように説明した。

「薬業学校の建築は昨年度校地買入を提案したが、不幸にも否決になった。同校は県立学校中設備最も不完全のもので、本校の改善をはかり、当初設立の目的を達するには、先ずもって設備を完全にするより急はない。種々県立学校に対して費用を要するのでなるべく経済的に、なるべく速に完成を期する方法として、赤十字社富山支部病院の敷地建物を買収し、建物を改築して校舎にあてる。この経費は継続費として要求したい」

かくてようやく、つぎのように決定した。

一金五万円 建築費

二万五千元 四十二年度

二万五千元 四十三年度

ついで薬草栽培の土地が不足しているから、隣接土地買上げを要望する提案が石黒準太郎議員からなされ採決された。

七、経 費

共立富山薬学校時代は、寄附金によってやってきたと言うが、まったく職員等の奉仕的勤務によってかろうじて、維持してきたといわれる。生徒がキップの装置を一つこわすと、東京からとりよせ、これを弁償させてようやく補うという有様だったともいわれている。

富山市立薬学校から、県立薬業学校にいたる間の経費はつぎのようであった。

| (市 立 時 代) | | (県 立 時 代) | |
|-----------|--------|-----------|-------|
| 明治三十年 | 三〇二円 | 同 三十四年 | 一六八六円 |
| 同 三十一年 | 八五七円 | 同 三十五年 | 一八七四円 |
| 同 三十二年 | 一〇五六二円 | 同 三十六年 | 二三〇四円 |
| 同 三十三年 | 一五七一円 | 同 三十七年 | 一八八二円 |
| | | 同 三十八年 | 二二四二円 |
| | | 同 三十九年 | 二五六一円 |
| | | 同 四十年 | 四八八四円 |
| | | 同 四十一年 | 六六七五円 |
| | | 同 四十二年 | 八三七三円 |

注：明治三十二年の経費が一〇五六二円となっているが、別の資料では一五六二になっているので、焼失のため臨時費が出たのか、どうか疑問である。おそらく、一五六二円が正しだろう。明治三十五年に県からも五百円の補助が支出されている。

第六節 教 育

一、教 育 一 般

薬学校、薬業の教育目的は、薬剤師を養成し、かつ売薬商人に薬学の大意を教え、富山売薬の振興をはかるにあったことは、ここに述べるまでもないことであるが、明治三十三年、檜垣知事の主催せる教育諮問会における日野校長の発言、共立富山薬学校の校則中に、衛生化学、裁判化学をとりいれ、また明治三十三年に衛生試験部を薬学校に附設し、一般の需要に応ずるなどの様子を見てゆくと、最初の売薬振興から次第に薬学一般の振興へと進展していることがうかがわれる。

ここでは詳細に述べる余裕がないが、明治四十二年皇太子殿下北陸行啓記念として出版された「行啓記念教育一班」なる書籍には、富山県立薬業学校の教育方針およびその内容が詳しく記されている。

二、学 科 目、教 科 書

学 科 目

先にかかげた共立富山薬学校の校則に学科目がかかげられているが、教師が少なく、そのとおりに全科目が行なわれたかどうかは明らかでない。授業時間は当時の募集広告にあるように、本科は、毎日午後一時から五時まで、選科は、午後一時から四時までと、午後六時から九時までの二回にわけて行なわれている。また速成科は午後六時から九時までの間に行なわれていたようである。しかも三ヶ月を一学期とし、三ヶ月毎に新入生を募集していたようである。

明治二十九年には速成科の程度をさげ、しかも午後六時から八時までの授業とし、学科目には、日本薬局方通俗解義、薬物学通俗解義をとりあげた。

同三十年には、予科制をとり、外国語、数学、地理、歴史、漢学を科目とした。

同三十二年には、予科に博物を加えた。

同三十五年には、別科に第二外国語とし支那語を加えた。これは、売薬印紙税のために内地の売り上げが減少し、台湾、中国等への輸出に力を注ぎ始めたために、支那語を教える必要を感じたからである。さらに、同三十三年には、富山実業協会が、ロシアへの売薬進出を考え、ロシア語を教えるようにとの要望を薬業学校へ提出した。これは実現されなかったようだ。

同四十年四月、富山県立薬業学校となつてようやく教師の陣容がととのつて、校則の実施も行なわれ、学校らしくなったように思われる。

予科（一ヶ年）では、修身、国語、数学、歴史、地理、物理、化学、薬用鉱物、薬用動物、植物、生理、独逸語、図画を課し、

本科では、修身、国語、物理、化学、薬用鉱物、薬用動物、薬用植物、独逸語、製薬、生薬、分析、薬局

方、薬品鑑定、調剤学、裁判化学、衛生化学、薬業法規を課した。

教科書

私立時代、市立薬学校時代どのような教科書が用いられていたか、明らかでない。記録にはっきり現われているのは、明治三十九年富山市立富山薬業学校教科書、明治四十二年富山県立薬業学校の教科書である。

ただ教科書が早くから使用されていたことは明治三十三年、三十四年、三十五年、三十六年頃に、売薬青年会から新入生に教科書が寄贈されていることからみて、いくらかの教科書の使用がうかがえる。

明治三十九年富山市立富山薬業学校

本科の部にかかげられたものは、修身、国語、歴史、地理、習字だけの教科書であった。
別科の部にかかげられたものは、

下山順一郎 生薬学

山田 董 化学粹、有機編

下山順一郎 製薬化学 上

山田 董 化学粹、無機編

鹿野猪太郎 製練法

内藤 光 分析化学（百科全書）
藤井 蔵

| | |
|-------|--------|
| 山田 董 | 物理学粹 |
| 下山順一郎 | 薬用植物学 |
| 高任 文毅 | 日清会話 |
| 木常次郎 | |
| 鄭 永邦 | 日漢英語合璧 |
| 吳 大五 | |

注：明治三十五年(1902)に第二外国語としてとりあげられた支那語は、さらに会話をとりいれたものにかわり、正科となった。
これは日露戦争後の清国貿易の必要性からなったものである。

明治四十二年の富山県立薬業学校教科書

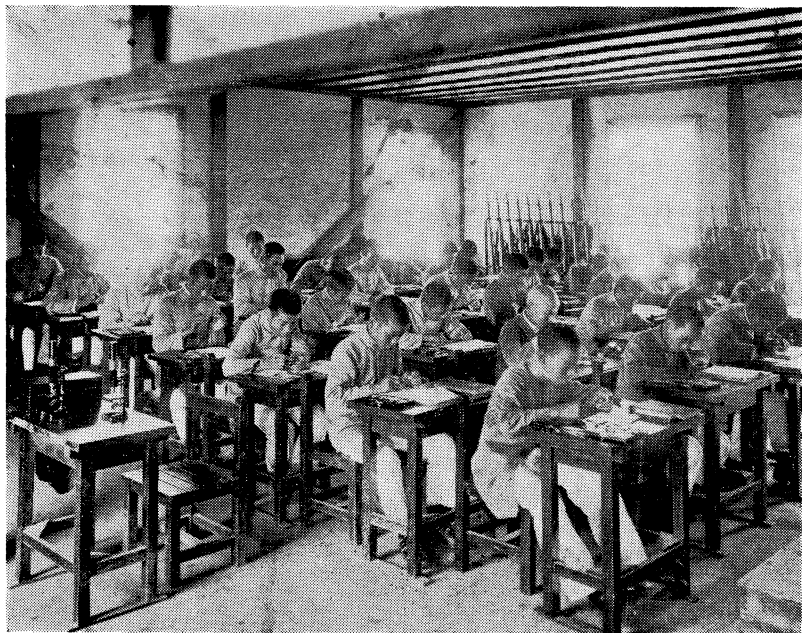
予科では一般教科の外「研究会の物理学教科書」「飯岡の化学教科書」「藤井の植物学教科書」「日野の生理衛生教科書」「大村の独逸語入門および独文読本」が採用された。

本科では、市立薬業学校時代と殆んど変らないものが採用され、新たに採用されたものは日本薬局方だけで他は口授で行なわれた。

三、教授法、実習、施設

教 授 法

明治四十二年九月、皇太子殿下北陸行啓に際して、特使を派遣して、授業を参観された。その時の教授案を



県立葉業学校 実習室

見れば、どのような内容の授業が当時なされていたか、その一端を知ることができる。

教 授 案

本科三年裁判化学実習教授案

担当者 高 島 清

一、問題 左ノ三種ノ問題ヲ課ス

(イ) 「モルフイネ」ノ検出

(ロ) 「コデイン」ノ検出

(ハ) 「ストリキニーネ」ノ検出

一、時間 二時間

一、教授ノ目的「モルフイネ」「コデイン」「ストリキニーネ」ハ裁判上屢々中毒事件ヲ惹起スルモノナレバ生徒ヲシテ之ガ検出ヲ充分ニ研究セシメ併セテ裁判化学上ニ必要ナル技術ヲ習得セシム

一、教授ノ方針 全級生徒ヲ三組ニ分チ「モルフイネ」「コデイン」「ストリキニーネ」ヲ未知検体トシテ各組ニ配布シ、生徒ヲシテ一般毒物

ノ檢出法ヲ熟知セシメタル後問題ノ解決ニ移ラシム

一、授業ノ進度 生徒ヲシテ各自ニ実習ノ成績ヲ報告セシメ、其成績ノ不良ナルモノニハ數回同一問題ノ解決ヲ繰返サシメ、其ノ良好ナルモノニハ更ニ次ノ問題ヲ授ケ其進度ノ記録ヲ教務主任ヘ提出ス

本科第一学年植物科実習教授案 一時間半

受持教員 日野五七郎

一、課題 菊科特徴ノ実習

二、材料 翠菊 エゾギク

三、実習ノ方法 各生徒ニ翠菊ノ花ノ一枝ヅツヲ分配シ、解剖器械ニヨリ解剖シ、且ツ全形ヲ写生シ各器官ノ形状、位置、數等ヲ調査セシメ、一々描写シテ種属ノ異同ヲ了解セシム。同時ニ花型花式ヲ描キテ更ニ位置、構造ヲ明カニスルニ在リ
四、完全ニ実習シ得タル生徒ノ一人ヲシテ黑板ニ其結果ヲ書カシメ一般ニ自己ノ分ト対照シ其正否ヲ知ラシム
五、次ニ全級生徒ヲシテ本課題ニツキ既ニ習得シタル智識ヲ応用シテ、翠菊ノ特徴ヨリ菊科ノ特徴ニ及ビ且ツ翠菊ノ性状ノ大略ヲ講演ス

本科二年級分析化学実習教授案

担当者 清水駒造

一、科目 定性分析

一、問題 未知体（未知体中ニ銅、亜鉛、マグネシウムヲ含有ス）

一、時間 三時間

一、教授ノ目的 銅、亜鉛、マグネシウムヲ含有スル未知体ヲ化学的ノ方法ヲ以テ之ヲ既知ノ形状（単体若クハ化合物）トナシテ製出シテ未知体中ニ於ケル各種成分ノ存否ヲ確定セシム

一、教授ノ方針 生徒ヲシテ未知体ニ対スル一般ノ檢出法ヲ熟知セシメ且未知体ノ解決ヲナサシム

一、授業ノ進度 生徒ヲシテ、口述、筆記ヲ以テ試験ノ成績ヲ報告セシメ、其不可ナル物ハ再々同一問題ノ解決ヲ繰返サシメ

良好ナルモノニハ新シキ問題ヲ与ヘ其進度ノ程度ヲ記録シテ教務主任ニ報告ス。

実 習

共立薬学校の校則の中には、実習科目として、調剤学、分析（定性、定量）、製薬実習を記載している。県立薬業学校では薬用植物学、分析化学、調剤学、裁判化学、薬品鑑定、衛生化学、製煉法について、実習を行なうことを決めている。

化学実習はどのような状態であつたろうか。

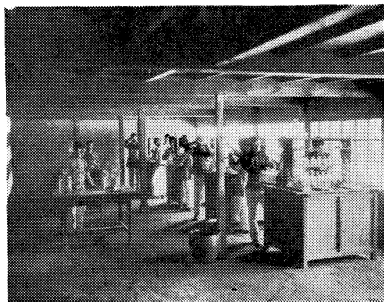
明治二十九年第一回創立記念式当日、分析室、化学機械室、物理機械

室、顕微鏡室で実験し、来賓に感動を与えたということである。

明治三十年、第一回卒業式が行なわれたときには、化学実験室にて、裁判化学上ミッチェルヒ氏の燐検出法を行ない、暗室中のため、燐光のであるまでマグネシウムを燃して燈用に供した。

明治三十二年八月十二日、大火で類焼したあと、九月十一日授業を円隆寺で再開、十一月初旬、実習を再開している。しかし器具、薬品少なく、一人分で数人が実習していた。

明治三十三年十月八日、別科生一同東岩瀬方面へ実習用海水の採取を行なった。



県立薬業学校 実習室



県立薬業学校 実習室

また、明治四十二年の皇太子殿下行啓記念の出版物にも、実習の一端を記している。

その他、校友会、同窓会、日曜講話会等においても実験を行なって、聴衆に見せていた。

もちろん、当時の設備は貧弱であつたろうことが想像され、かつ非常な苦心が払われていたことが、いろいろの記録の端に伺われるとともに、当時の社会に薬学、化学の重要性を知らせるために大きな役割をしたことである。

施設、備品

創立にあたって、器械に五〇〇円の支出が決定されているが、どのようなものが購入されたか明かない。日野校長が明治三十三年三月の教育諮問会で「……第二本校の不振は設備、教員、薬学科程の不完全……」と述べたごとく、生徒実習は行なわれたとは言うものの設備が充分でなかったことはうかがわれる。

明治三十二年十二月十四日の富山市参事会の決議にもとづき、薬学校に化学衛生試験を行なわしめることになり、これによって、相当薬品機械が購入されたことが報ぜられている。

明治三十四年八月、下山博士の視察が行なわれ、その年の十二月三日に生薬標本三百余种が同博士から寄贈されたことは、当時にとって尊いものであつたろう。

また明治三十五年五月三十一日、高津武治から薬品標本が寄贈された。

四、植物採集と薬草園

生薬学ならびに植物学の授業の一端として植物採取または遠足をかねた植物採取が時々行なわれていた。

明治二十八年七月二十三日―五日、山田温泉、下若鉾泉、八尾地方へ、日野五七郎、武庫川光寧両講師引率のもとに、本科一、二年生が植物採取にでかけた。

同二十九年八月十八―二十六日、日野五七郎講師が、動、鉾植物採取のため、立山に登山、多枝原温泉、松平温泉方面にも採取した。

同三十三年十月頃、職員生徒一同は上新川郡大沢野村八木山地方へ遠足し、植物百数十種を採集し、帰途、富山電燈会社の発電所を参観した。

同三十四年十月十四日、職員一同は生徒一同を引率し、高岡、伏木、氷見地方を経て二上山へ遠足運動をかねて薬草採取にでかけた。

同三十五年六月十九―二十日、職員一同は、生徒百二十名を引率し、中新川郡五百石、大岩山、立川寺方面に、遠足をかねて、薬草を採取した、

市立薬業学校時代の記録によると、植物学の野外教授について次のようなことがのべられている。

本校にては別科一年、二年級共に植物時数は一週二時間宛とす前者は植物形態学植物生理学、後者は植物分類学を教授す一ヶ月一度両級共に郊外に出で教師自ら草木を取り形状、柔剛、脈絡、花等の特徴を口述したる後雑記帳に記入せしむ又材料宿題として之を解剖せしむ、画用紙は「ケント」等を用ひずして普通のものに堅き鉛筆にて画かしむ、解剖器、針「ピンセット」を各自に与へ美的ならず専ら確実な画かしむるを旨とす。

本校卒業生は重に文部省薬剤師試験に應ずるものなれば、植物各科各属の特徴及び薬用植物を知るは最も必要とすることとなり、故に郊外教授せし材料等各自に膳葉を作らしめつつあれども其術至て拙劣なり。

効果

長所

第一、観察を鋭敏にす

第二、自然界につき正確なる思想を得しむ

学校にて各科目を教ふる目的は種々の部分発達を要す。若し夫れ文学上の趣味をのみ発達せしめ児童之に熱中せば感情的人間にて如斯偏寄の教育は中等教育者の取らざるところなり、故に一方理学的の事をも加へ感情に判断力を附加し以て完全となすにあり。

故に文学的思想発達に對し、実物に照し同時に觀察力を養成す。彼の文人墨客園芸家、鮮麗芳香大小を賞するのみは吾人の取らざるところ、充分觀察により粗より細に調査報告するに実物に依りて特徴を知るに至らしむ。故に教科書の挿画掛図よりも野外教授する効果亦尠しとせず。

正確なる思想は博物学研究に直接の功能あり各事物の応用は確實なる思想よりして生ずるものにして其応用至つて必要たり、例へば生物は天然に「ワク」と云うも種々の実験を施し之れが応用の結果其然らざるを知る。彼の日月星辰より草木に至る迄の秩序整然たるも迷信者は卜者の方向、過福運命により左右にせんとす「狐は人をバカス」皆天然の思想「シーブ、エツフクト」は如何に知るか、教室よりも天然の青々たる天井と山、海、河の自然物につき正確思想は効外にて受得せられるところ其効果亦至大なり。

尚体育の補助となる。

(短所) 児童身体上の要求に對する合意的の満足を与えるものにして運動、清潔、摂生等規律的生活をなさしめ純潔なる意志を有せしむるも、一カ月数回の野外教授は児童の行為をして粗野に流るる傾向あり。解剖をなさしむる材料は最も容易き簡單なるものを撰択し帰納的になさしむ。尚野山にては一種の興味を起し自然を愛し從て

国家を愛せしむるに至る。要するに野外教授を適度に施行せば益ありて害渺なし。

薬 草 園

薬草園は創立以来設立を見なかった。明治四十二年、皇太子殿下北陸行啓記念事業として、薬草園の設置をとりあげている。

「基礎学科の一科たる薬用植物学講習上薬草園設置の須要なるは言をまたず、薬草を培養して適良なる生薬を供給する端緒を開くがごときも薬草園の設置によりて初めてこれを期し得べし。彼の医治応用上最も貴重せらるるところのデキタリスのごとき普通薬舗に販売するところのものは往々不適品ありて治療を誤ることは刀圭者の常に痛嘆するところ、本園経営によりてこれら薬草培養事業の奨励に資せんとす」

その当時、薬業界でも薬草園の設置の声があり、その設置を促す声もあった。しかし、県立薬学専門学校になって漸く実現の運びになった。

五、図 書

薬学校、薬業時代には参考図書が購入せられていたが、とくに図書室はなかった。県立薬業学校になってから、図書係が初めて設けられたようである。

明治三十二年八月十二日の富山市の大火の際には、職員、生徒の尽力で図書、備品類が運び出されたと記されている。現在富山大学薬学部図書館には、「共立富山薬学校印」「富山市立富山薬学校印」「富山県富山

市立富山薬業学校印」「富山県立薬業学校」の校印を押した図書が保存されている。もちろんその当時どれだけの図書が購入されたか記録がないので不明である。現存している各時代に購入した図書は

共立富山薬学校時代 六冊

富山市立富山薬学校時代 一九冊

富山県富山市立富山薬業学校 二二冊

富山県立薬業学校 一五冊

である。

六、校友会と課外活動

校 友 会

校友会の組織ができたのがいつか記録が明かでないが、市立富山薬業学校になってから会則をつくり、設置されたようである。明治二十九年創立せられた同窓会は、校友会と同窓会の合併したようなものであった。

この校友会も、卒業生（元共立、市立薬学校および本校卒業生）と在校生とから組織されていることからみると名は異っているが、同じようである。

明治三十九年四月、卒業式終了式後、来賓および名誉特別会員五十余名正会員八十名の出席を得て開いた。当日の主な講演はつぎのようであった。

藤坂友次郎 卒業生に願う

中村松太郎 新陳代謝

中林清吉 運動の効用

浅地宗旭 所感

菅沼賢隆 会中における感

朝尾好三 勉強の効

稲泉甚四郎 演題を貴ぶ

早川正直 学について

同四十年一月十二日の校友会には第八十九回と記されていることをみると、相当ひんぱんに会がもたれたようである。会則中の通常会の項をみると、学術に関する演説、質議、討論とある。すなわち、知識の交換が主をなしていたようである。

同四十一年六月十日には、庭球会が開かれたことが記されている。また四十一年二月退職した数見宗一郎が記念として下山博士著第三改正日本薬局方詳解一部を校友会に寄贈した記事を見ると、図書もある程度購入していたように思われる。

同四十三年三月十二日、富山県立薬業学校の校友会の解散式を行なった。来賓の主なる人は、玉川富山連隊区司令部副官、阿部県売薬同業組合長、日南田同事務長、高田校医、魚住薬業誌記者等であって、黒白の幔幕を四隅に張り、天井には、万国旗を十文字に吊り、会場には数ヶ所に種々なる盆栽を配置してあった由、中西司馬校長の下に閉会式を終った。

課 外 活 動

課外運動としては、柔道、擊劍等の課外教授を行ない、遠足もよく行なった。また先にのべたように、植物採取もかねてよく行なわれた。

運動会は、校庭が狭いために、四方の海岸にいつて行なうこともあった。時には、浜で綱引を行ない、捕獲した魚のうち参考になるものは、動物標本とすることもあった。

また金沢方面に旅行したり、病院、学校の見学を行なった。



生徒作品陳列場

明治四十一年三月には、発火演習を行なった記録がある。軍事教練の始めであつたのであろうか。

七、成績品の出品、展覧

明治三十三年七月三十一日—八月六日、関西府県教育品展覧会へ生徒実習になる化学用品、医薬品百余点、薬草、習字、掛図等出品して、二十名が賞品および賞状をうけた。

明治三十六年、大阪で開かれた第五回内国勸業博覧会へ生徒の製作品を出品した。
明治四十二年、皇太子殿下行啓に際し、生徒作品を出品した。

皇太子殿下行啓当時台覧成績品

| 生徒成績品陳列目次 | | |
|-------------|--------|------------|
| 薬名 | 氏名 | 製薬六十八品 |
| 亜硝酸アミール | 浅地 宗旭 | アニリン |
| 醋酸エーテル | 田村 義治 | ヨードコロジウム |
| 醋 酸 | 高藤 政一 | 三硫化アンチモニウム |
| スルフォ石炭酸亜鉛 | 浅地 宗旭 | 醋 酸 銅 |
| 硝酸亜酸化汞 | 河辺 友次郎 | 硫酸銅アンモニウム |
| 枸橼酸亜鉛 | 平野 勝治 | 枸橼酸鉄アンモニウム |
| 硝 酸 鉛 | 横江 義清 | 沃度化鉛 |
| アセトアニリッド | 中土庄之助 | デルマトール |
| ウロトロビン | 中土庄之助 | カフイーネ |
| ブローム化アンモニウム | 中村 貞喜 | 焦性磷酸ナトリウム |
| 亜クロール鉄 | 田村 欣輔 | 安息香酸ナトリウム |
| クロール化マンガン | 田辺 精三 | 硝酸ナトリウム |
| クローム酸 | 改井 覚太郎 | 硫酸酸化鉄 |
| | | 吉沢 初太郎 |

| | | | |
|--------------|-------|--------------|-------|
| クローム酸アンモニウム | 西野清太郎 | クロール化カルチウム | 河辺友次郎 |
| クローム酸カリウム | 高野久平 | 重質炭酸マグネシウム | 森田義平 |
| 神功石 | 浅地宗旭 | クロール含汞アンモニウム | 田村義治 |
| 明礬 | 中土庄之助 | 醋酸カリウム | 吉沢初太郎 |
| 酒石酸カリウムナトリウム | 田中欣輔 | 黄色血鹼塩 | 田中欣輔 |
| 食塩 | 阿部又之助 | 硫化カリウム | 同 |
| 沸騰枸橼酸マグネシウム | 同 | 沈降硫黄 | 同 |
| 鉄明礬 | 津野重作 | 粒状亜鉛 | 西野清太郎 |
| 含糖炭酸鉄 | 横江義清 | 重酒石酸カリウム | 同 |
| 動物炭 | 鷹田与七郎 | 重クローム酸カリウム | 改井覚太郎 |
| 硝酸カリウム | 田中欣輔 | 硫酸銅 | 田辺精三 |
| 硫酸亜鉛 | 高野久平 | 塩化銅アンモニウム | 阿部又之助 |
| 硫酸ナトリウム | 田辺精三 | 蓚酸鉄カリウム | 中土庄之助 |
| 蓚酸アンモニウム | 荒木文二 | 硫酸鉄 | 田村義治 |
| 蓚酸 | 田村義治 | 硫酸鉄アンモニウム | 田辺精三 |
| 芳香丁幾 | 中土庄之助 | 次醋酸鉛 | 横江義清 |
| 苦味丁幾 | 吉沢初太郎 | 芳香醋 | 鷹田与七郎 |
| 萇荳丁幾 | 田辺精三 | 亜砒酸カリウム液 | 吉沢初太郎 |
| 複方ラヘデンル丁幾 | 野津重作 | 芳香精 | 田中仙三郎 |

過硫酸鉄液
酸性芳香丁幾
高藤政一
高藤政一
ミन्दレル精
発烟硝酸
横江義清
阿部友次郎

生薬顕微鏡的製品

遠志根
キナ皮
カシヤ木
石榴幹皮
マンダラグ葉

独逸習字、図画、作文、習字、合作掛軸

八、生徒の生活

先にのべた課外活動、植物採取の行事によって、正規の授業外の様子の一端はうかがえるが。創立以来、志願者が少なく、薬業界の人々が、募集に苦勞し、入学に際しては、教科書、帽子、徽章等を寄贈し、茶話会を開いて歓迎、あるいは激励し、卒業式、終了式には多数出席して、生徒の奨学に努力したことは、並大抵ではなかった。

授業料は、明治二十九年頃で、速成科一ヶ月二十錢であつたとのことである。明治四十二年県立薬業学校時代の生徒の学資をみると次のようになっている。(年額)

| 総額 | 公認下宿舎費 | | | 授業料 (本科) | 図書 文具費 | 被服費 | 雑費 | 計 |
|-------------|------------|------------|------------|-------------|-----------|------------|------------|------------|
| | 食費 | 舎費 | 計 | | | | | |
| 一一九・四三 円 | 六六・〇〇 円 | 一一・〇〇 円 | 七七・〇〇 円 | 一一・〇〇 円 | 九・四七 円 | 一〇・九六 円 | 一一・〇〇 円 | 四二・四三 円 |

明治四十一年度の入学生中には、北海道、新潟、石川からの生徒があり、それまでは、殆んど県内の生徒だ

けであったようである。

第七章 同 窓 会

薬学校時代の同窓の集りは、早くも明治二十九年に始められた。二月十一日の記念式後卒業生および在学生によって発会式が行なわれた。来賓は、同校評議員、講師等で、発起人総代として在学生尾谷兼太郎主意を述べ、邨沢校長大いに賛成の意を述べ、武庫川講師「総ての会と言うものの性質を述べ、本会も朝産暮死の轍をふまないように」と注意をひき、併せて賛成の辞をのべた。選科生関野は本会員に希望をのべた。

総理一名、会頭、副会頭各一名、幹事三名、会員は通常会員、名誉会員の二種とし、会日は毎月第二土曜日にて、会合は総会、臨時会、通常会とし、会費は当分一ヶ月二銭と決めた。

明治三十年十二月四日、本日の出席者数十名、役員には、会頭邨沢金広、副会頭関野英之助、理事金子清蔵、尾谷健太郎当选、次のような講演があった。

- 1、硫化金属を如何に区別するやおよびその要件
- 2、ヘロンス球とは如何、その応用
- 3、一キログラムの硫黄を燃焼して幾何の亜硫酸ガスを生成するや
- 4、硬水は軟水にて豆類を煮るよりも硬固る理由如何
- 5、暗体の発光体によりて発光する理由

講師武庫川光寧高等学校薬学科在学中「裁判毒殺事件に応じた実験談」があった。

明治三十三年九月二十七日、富山薬業学校の仮校舎にて開催、来賓、特別会員、通常会員四十六名出席、型の如き議事があつて、つぎの講演があつた。

立山薬草に就いて

田中徳藏

共進会場の飲料水性質

金盛滋次郎

市内販売の酢試験成績

柳沢秀吉

役員改選の結果、会長 堀大次郎校長、副会長 岩城栄次郎、幹事 金盛滋次郎・前田九郎、会計 田中徳藏、石野正久、評議員 吉山豊次郎・日水清治・中川治一郎

明治三十九年三月、本日の会の講演は次の様であつた。

1、卒業生に願う

堤 從清 校長

2、鉄の反応

南日 糸二郎

3、淘汰に就いて

亀谷 芳之助

4、卒業生に乞う

米田 力次郎

右の外、会合は毎年行なわれ、多いときは年に三〜四回も行なわれ、出席会員も四、五十名を降ることが少なかつた。講演も熱心で、研究発表、同窓会および母校の発展に関する意見の発表もあつて非常に盛会であつたようである。来賓には、大管昇平、長沢米次郎、岡村茂平等、売薬青年会員の顔も時々見え、激励されるところがあつた。また母校の先生方も演説に参加し、会員を指導し、また激励せられることも多かつた。

卒業生の活動

共立富山薬学校創立以来の本科、別科、選科卒業生の数は、明かでないが（資料によりまちまちである）、現在までの調査では、二百四十名位の氏名が判明してきた。それらの人々の内、現存している人の人数もはっきりしていないが、十数名の方がいられるのではないか、またそれらの卒業生の活動状況も明かでないが、多くの卒業生は、売薬業者として活躍され、富山売薬の振興につくされ、一部の人は、薬剤師となり、病院、試験場、会社、官公庁等に勤務活動され、とくに、第一回の卒業生若林常太郎は、県外に活動後、富山で薬局を開くかたわら、初の薬剤師として広貫堂に勤務された（明治三十五年）。さらに学界方面では柳沢秀吉は金沢医学専門学校薬学科を終え、金尾清造は東京帝国大学医薬部薬学科選科修了、それぞれ薬学博士の学位を取得された。また富山薬学専門学校の教官をされた吉田和平先生は、陸軍の薬剤官となった人で、共立富山薬学校の第二回の卒業生である。

第八節 名士の視察とその講演

明治二十三年東京帝国大学薬学科丹波敬三教授来富せられ、売薬業の状況を視察し、売薬振興のため薬学校の重要性を強調、薬学校設立の近因をつくられた。薬学校の設立後も東京の有名な殊に東京帝国大学の教授が次々と来富せられ、薬学、薬業の振興のために指導と激励をなし、中央から遠く離れた僻地にある富山の発展史に大きな役目を果たしたことは、特筆大書に価することであった。

注：明治二十年代の北陸線は、西は福井県の柳ヶ瀬まで、東は直江津までで、もちろん高山線はなかった。しかも碓氷峠は約二時間の円太郎馬車で連絡していて、東京へ行くには、東岩瀬から船で直江津までゆき、それから汽車にのったもので

あった。新聞は郵便で、一週間もかかってやっと到着したとのことであつた。

同三十一年八月二十三日、東京帝国大学医学部薬学科丹羽藤吉郎教授は、直江津港から岩瀬港に到着、富山市立富山薬学校長桜井勘六、薬業家有志多数出迎えた。夜は八清楼で懇親会を開き、労をねぎらい、二十四日は、千歳館で、「医薬分業」について講演し、参会者に多大の感銘を与えた。

同三十二年、東京帝国大学教授長井長義博士、田原良純博士が北陸地方の薬学、薬業視察に来られるということで、その機会に、富山で県下薬学大会、薬剤師会臨時大会等を開く予定で富山実業協会、富山県工業会、富山売薬同志会等とも相協力して準備中のところ、八月十二日の富山大火で休止にたちいった。

同三十四年八月十一日、東京帝国大学教授、日本薬剤師会々頭薬学博士下山順一郎は、随行員薬学士慶松勝左衛門、日本薬剤師会理事雨宮綾太郎、日本薬学会員鈴木正肥等とともに来富した。今回北陸方面への出張は日本薬局方調査委員として薬物調査が主目的であつた。富山県技手福島猪太郎、薬剤師会員横江清次郎、大久保秀民等は金沢まで出迎え、富山駅には、県並びに薬業関係者百余名歓迎のため出迎えをした。一行は人力車をつらねて富山ホテルに投宿、午後は同ホテル楼上で、富山県薬剤師会員のために講話がなされた。

十二日、一行は午前県庁を訪問、次に市立富山病院、市立富山薬業学校を視察し、同校講堂において同窓会員一同に、「将来薬学研究上有益な講話」をなした。午後市内五番町光厳寺において、一行の講話会が開かれた。聴講者は、檜垣知事、並河警部長、沢原警視を始めとし、市内薬業者は開会前より炎暑をおかして続々集まり、開会頃には、約八百名が入った。午後二時半邨沢金広開会の辞をのべ

雨宮綾太郎は、「売薬事業の沿革から将来について述べ、薬学の進歩、売薬の改良の必要に論及し、その進歩と改良は他人に依頼することなく、当業者自らこれを実行しなくてはならぬ」というような話をなした。

次いで、慶松勝左衛門は「日本の薬学はこれを欧米各国にくらべて、なお幼稚の時代にある。したがって輸入売薬が多いのは、製薬を改良しないからであるとし、アルコール、醋酸のことなど例にひき、さらに木材から醋酸を製造すれば、利益の大であることを統計によって説明し、大いに国家の富強をはからねばならないと強調した。

下山博士は、まず北陸出張の理由をのべ、凡そ次のような講話をなした。

近來輸入の超過していまだこれを防圧する能はざるは慨嘆に堪えざる所たり、これが策を講ずる果して如何（第一）西洋より本邦へ輸入する物品を製造すること（第二）本邦固有の物産を改良しもしくは新たに製造して海外へ輸出すること此の二策をとらざるべからず、しかして殖産興業の範圍は頗る広きが故に各専門家夫れ／＼之を分担し薬業家は薬学の事業を起さざるべからずと説き起し、県下の売薬業は三百年來最も盛んにして其産額は全国中の五分の一を占め居れり。此の莫大なる事業を拡張し進んで之を海外へ輸出するに至れば独り県下を利するのみならず我国を益する甚だ大なるべし。然るに売薬は煙草と齊しく有害視せられ第一に營業税、第二に印紙税を課せられ居るは頗る遺憾とする所にして、今の売薬規則は明治八年に成り、当時売薬其物は恰も有害物の如く治し得べき病人も医師に就かずして之を飲まば却って不治の症に陥るかの考を以て制定せられたるものなり。然れども欧米諸國に於ては、夙に売薬を許しありて且つ便益の点あり即ち毒薬、劇薬、普通薬の三種に分ちて毒劇薬は医師の処方によりて調査し得ることとなり居れども、我国に於ては普通薬の外は売薬に用ゆるを許されず、是れ我國の彼國に比して不便の点なり。殊に病人其者は悉く医師の治療を受け得らるるものにあらず、たとえば微少の怪我の如きは即功紙一枚にて容易に治癒し得べく、且つ寒村僻地に在りて急遽疾病に罹り医師を迎うるに隙なきとき一服の売薬以て一時の急を救うを得べし。即ち売薬は烟草の如き香水の如き贅沢物にあらざるに、或は印紙税を或は輸入税を徴せらるるは慨嘆に堪えざる次第にして、当業者は政府に対して能く事情を明かにし以て規則の改正を促さざるべからずと述べ、己に売薬の必要を認むれば当業者は益々其改良を講ぜざるべからず、近時売薬を

売弘めんが為め懸賞を為す者あり、甚だしきは何日服して癒らざれば金を遣るなど広告する者あるは実に見るに忍びざる所にして、かくの如き広告を為すが為め政府は却つて有害視するに至るべし。故に同業者は互に相戒め将来諸税を廢せんと欲せば、かくの如き卑劣の広告を為さずして更に改良を加へ大に世間の信用を博せざるべからずと説き、今の規則は法律に抵触する個所ありとて法律第十号には薬剤師の權利を規定し医師の処方により藥品を調合販売するものとなしあるにかかはらず、規則は普通の藥種商人にもこれを許しあり、支那においてすら医師の処方により藥品を調合販売するは薬剤師に限りあるに、我國において一般の素人にもこれを許せるは矛盾のはなはだしきをもって、これが改良の曉は從來許しあるものには既得權としてなお許すべきも相統者に至りては薬剤師に限りこれを許すこととせざれば法律と抵触するのみならず、したがって藥學博士藥學士の信用を減するに至るべしと論じ、それより學問の必要に移り当地のごときは學校を設け、少なからざる費用を投じつつありと聞く、これ誠にしかるべきことにて事業の完全を望まば學問の研究を怠るべからず。かの草根木皮をもつて醫藥となしつつありし時代はただ本草綱目及び傷寒論を知りて當業者はその効能さへ述べ立つれば可なりしと雖も、時勢の進歩に伴うときは決してこれをもつて足れりとすべからず。ことに現今はもっぱら西洋の藥品を用ゆることが故に、益々學問の必要あり。斯學の發達いまだかのごとくならざるにより西洋の藥品はますます超過し來り、ひいて經濟上損失を与うるや大なり。西洋諸國は藥品を製造するに巧みなるをもつて製藥場のごときは他人に見することなく、且つその多くは自己の發明に成るにより我國のごときもまた彼がごとく製藥を發明せざるべからず。これを發明するには姑息なる學問をもつてよくするところにあらず、時にあるいは洋行して研究を積むべきなり。諸君は斯業の擴張を謀ると共に學問の研究を忘るべからずと説き、それより藥品の原料には人工と天產の二あり人工のものは製造し得べしといえども、天產中我國において得べからざるものあり、而かも古來おもに輸入し來れる天產物中龍腦のごとき阿仙のごとき丁香のごとき甘草のごときは我國において製造しもしくは移植するを得、したがって輸入を仰がずして利益を得るものありと述べて龍腦と樟腦のことに移り、樟腦は樟より出する天產にて人工を以て成しがたきものなれども、今や

台湾にはその経済の大部分を補うべき樟樹あること及び樟樹に含有せる炭素水素酸素の分量のことを化学的に示し、また龍腦には梅花龍腦と日の出龍腦の二種ありてその差異あることならびに梅花龍腦は人工にて製し得べからざるも日の出龍腦は樟腦を以て製し得べきことを詳しくボールドに分量を記して示し、樟腦は台湾において多量を得べきを以てこの製法を用ゆればついに輸入を仰がざるに至るべきこと及び阿仙藥は新嘉坡より丁香は印度より多く輸入すれどもこれを台湾に移植し得らるること、また丸藥の土台として最も多く輸入せる甘草もまた移植せば蕃植を見るに至るべしと論じ、しかして藥業家は製藥の改良をはかりて朝鮮支那はもちろん印度西洋にまでも販路を拡張すると共に學理を応用して原料を製造するに至れば、ただに県下の利益のみならず我國に取りて大なる利益あり。はたしてしからば政府もまたついに売藥を煙と同一視せずして營業税印紙税を全廢するに至るべし。ここに進ましむると否とは一に諸君の方寸に在るなり。要は學問を基礎として斯業を進歩せしめもつて輸入の超過を防ぎて國家の經濟に益せんことこれ諸君に對して希望して止まざるものなり云々。

講話後、午後五時半から華見橋畔八清樓において、一行の歓迎宴會が催された。同夜の來賓は、檜垣知事、並河警部長、沢原警視、第十二銀行取締役および各新聞記者等で、その他の會員は藥劑師會、売藥同業組合、売藥同志會、藥種業同盟會、売藥青年會の各會員約百五十余名に達し、地方稀に見る盛會であつた。歓迎委員長中田清兵衛氏は、開會に當り、「博士一行炎暑の時季をも厭わず遠路來富せられ、昨今兩日有益なる講話をなして下さつた。藥劑師一同、および売藥業者一同感謝にたえない。我々は將來博士の高説に隨ひ、益々斯業の發達に尽瘁せんことをちかいます……」云々と挨拶し、遠來の博士一行の勞をねぎらい會を閉じた。下山博士一行の歓迎の世話役の主な人々には、中田清兵衛、阿部初太郎、邨沢金広、日南田宇八郎、沢田金太郎、中田太七郎、安達周平、横江清太郎、堀大次郎、大久保秀民、松井伊平、寺田久蔵、島田治三郎、大菅昇平、水

上嘉平、村尾定保諸氏の名があった。

同三十六年八月二十九日、内務省衛生技師池口慶三の衛生事務視察のため来富せられた機会に、富山県薬剤師会、富山売薬同業組合、富山県売薬青年会、富山薬業研究会の四個団体合同発起となり、三十日午後二時から、同技師を始め、久保本県警務部長、黒田同衛生課長を富山ホテルに招待して、講話会を開いた。来会者約百七十余名であった。池口技師の話は大体つぎのようであった。「従来の売薬に対する世人の觀念から、従来の売薬当業者と現時および将来の当業者を論じ、進んで売薬そのものの必要より現時の状況ならびに改良方法の手段および富山の売薬業者に対する将来への希望等を述べ、その上、薬品の変敗、分析効無効論等に説きおよび」約一時間半をついやして熱心に多大の感動を与えられた。

三十一日には、李家知事および久保警部長、池口技師を富山ホテルに招待、慰勞された。

九月一日には、池口技師は、本県警察部、福島技手とともに薬業学校、広貫堂を視察した。

同四十一年十一月十一日、小松原文相は明石秘書官、真野実業学務局長を同道、県側からは、宇佐美知事、伊藤事務官、高松教育課長、県視学、その他県官、新聞記者十六名余が同行して、山王町の富山県立薬業学校の仮校舎を視察した。各教室の授業を參觀、実習室にて本科二年生の分析をことに注目して午後三時退出、ただちに県庁に向った。本校は、新校舎建築案が県会に提案されておる時であり、この視察は誠に意義あるものであった。同四十一年の県会で、薬学専門学校昇格の諮問案が提出されたのも、この視察をめぐっての文部省側、県側、学校側との内部的交渉があったことの結果のように思われる。もちろん、そのなかに、長井博士を中心とする東京大学の教授各位の支持後援のあったことがあづかって大いに力があったのである。

以上の外、内務省衛生局長高田善一（明治二十七年）、草野大軍医正（明治二十九年）、農商務省山林局長

原保太郎（明治三十四年）、文部省実業教育局長真野文二、文部省視学官中川謙二郎（明治三十六年）、大井玄洞（明治三十六年）、金沢医学専門学校薬学科主任桜井小平太（明治三十六年）等が視察のため来校されている。

九、対 外 活 動

売薬業界によって育てられた学校である。校長始め教師、卒業生達は、富山薬業界を育てるために、講習会あるいは研究会を開き、また同窓会、校友会を通じて研究を発表し、啓学と研究を怠らなかつた。

また学校に試験部を設け、一般の試験の依頼に応じた。

つぎに、各種の会合を列記する。

明治二十七年五月 小杉の厚生師天堂では、売薬の改良のため金沢病院副院長医学士逸見絞九郎に調剤方の改良を托した。

同六月 八尾町の天地竹太郎が和漢医同盟会を主催し、傷寒論の研究を始めた。

同二十八年 病院医員、市吏員有志者、薬剤師、市医等の発企で、衛生談話会の開催。

同三十年三月十四日、薬学講習会開催、日野五七郎（薬学校教諭）講師となる。

同三十二年五月二十三日、帰省中の小倉衛戌病院勤務の陸軍三等薬剤官武庫川光寧（元薬学校教員）ならびに東京医科大学第一病院模範薬局員若林常太郎（共立薬学校第一回卒業生）を招き、富山薬学校楼上において薬学奨励の演説を請うた。

同三十二年 日野薬学校長、富山薬剤株式会社創立式に参列し、売薬の營業人に薬剤師が必要であり、行商人に資格者を採用することが必要であると説いた。

同三十三年、日曜講話会

富山市会が市立薬学校の廃校決議を行なったとき、反対運動のために結成した富山売薬青年会は、同三十三年末頃から、日曜講話会を開催し、薬学校教師、薬剤師の講話を聞き、また売薬振興策を論じた。毎回多数の聴講者があり、明治三十六年ごろまでけいぞくしたことを当時の日刊新聞が報じている。

日曜講話会における講演題のうち専門的なもの二、三例をかかげる。

硝蒼、デルマトル及びその処方就て、安息香酸ならびに植物の奇効に就き、阿片の説明外に処方、改良売薬と薬学応用処方談、重曹の精粗鑑別に就てならびに健胃剤、沃度の製法効用ならびに化学的作用及び肉類の鑑別法実験ならびに緩下剤処方談、石炭酸の性質ならびに衛生上の鍋有毒金属及び肺病の特効薬処方例、クレオソートと肺病について、次撒里失兒酸蒼鉛について、磷酸コデインについて、デルマトールの性質・効能・処方附銀箔丸衣の試験法、喫煙の有害なる理由、新薬アイロールの性状及び処方、沃度製剤の注意及び衣服汚点等の除去法、強壯薬と鉄剤について、消毒薬としてのフオルマリンの効力ならびにその実験談、温泉についてその分析及び効用、ナフタリン、黄連の医治効用及び塩化アンモニウムに就て。

同三十四年 岸田吟香（精椅水本舗主、東京）の来富を機に、富山市売薬家および薬学校校長堀大次郎の発起で同氏から「清韓両国における売薬談」を聞いた。

同三十六年十月十七日、富山売薬同業組合においては、組合顧問である金沢医学専門学校教頭製薬士桜井小平太を招き、講話会を開く。演題は売薬製剤の改良について。

同三十六年十月二十四日、富山売薬青年会では、薬業学校堀大次郎を招き、薬業講習会を山王町薬業学校に開催。

同四十二年五月二十九日、売薬青年倶楽部（東水橋町）では、富山県立薬業学校校長中西司馬、堤從清教諭、日野五七郎教諭を招待し、「薬学の意義、薬品の撰択、調剤装置法、製薬」等につき講話をきいた。

薬学校の試験部開設

明治三十三年、富山市参事会で、富山市立薬業学校に試験部を設け、衛生試験、化学試験を行なわしめるところにした。

つぎにきめられた試験料表をかかげる。

| 種 別 | 程 度 | 試 験 料 最 低 円 | 範 囲 最 高 円 |
|------------|--------|----------------|--------------|
| 化学的及工業的ノ製品 | 製造並に精製 | 一・〇〇〇 | 一〇・〇〇〇 |
| | 定量分析 | 一・〇〇〇 | 八・〇〇〇 |
| | 定性分析 | 五〇〇 | 二・五〇〇 |
| 飲料水及氷雪 | 飲用適否 | 二〇〇 | 五〇〇 |
| | 定性定量分析 | 一・〇〇〇 | 四・〇〇〇 |
| | 飲用適否 | 六〇〇 | 一・〇〇〇 |
| 乳 類 | 定性定量分析 | 一・五〇〇 | 三・〇〇〇 |
| | 定性定量分析 | 一・五〇〇 | 三・〇〇〇 |
| 酒 類 | 定性定量分析 | 一・五〇〇 | 三・〇〇〇 |
| | 定性定量分析 | 一・五〇〇 | 三・〇〇〇 |

| | | | | |
|-----------------|--------|--------|-------|-------|
| 鉈 | 泉 | 定性定量分析 | 一・〇〇〇 | 五・〇〇〇 |
| 酢。鉛。醬油。茶。絵具。柔料等 | | | 一・〇〇〇 | 五・〇〇〇 |
| 炭酸瓦斯 | 定性定量分析 | 七・〇〇 | 二・五〇〇 | |
| 鉈物類 | 右 | 同 | 一・〇〇〇 | 五・〇〇〇 |
| 化粧類 | 右 | 同 | 一・〇〇〇 | 二・五〇〇 |
| 警察裁判ニ関スル試験 | | | 一・〇〇〇 | 八・〇〇〇 |
| 日本薬局方薬品 | 適 | 否 | 三・〇〇 | 五・〇〇 |
| 証明書 | | | 五・〇〇 | 一・〇〇〇 |

第十節 薬業諸団体の活動

広貫堂を始めとする各売薬会社の尽力はもちろんであるが、さらに各売薬業関係団体、薬剤師会、薬種業関係団体が薬学校の創立、学校の維持、生徒の募集、生徒の激励、校舎の再築、市移管、市会廃校決議の復活、県移管等にたいして払った努力は、前述の歴史の中に記したところであるが、ここにそれらの団体名をかかげる。

富山県薬剤師会（明治二十三年十月設立）会長中田清兵衛、副会長松江房雄、翌二十四年横江清次郎が副会長となり、大いに貢献した。

富山売薬改良組合（明治二十八年一月設立）
薬学研究会（伊達組の佐伯権三郎、布上亀太郎、松井元次等により明治三十年一月設立）

富山売薬同志会（中田清兵衛、阿部初太郎、邨沢金広、沢田金太郎、志波久次郎、横江清次郎等発起のもとに、明治三十年一月設立）

富山薬学会（薬業会？）（明治三十一年頃）

富山売薬倶楽部（売薬有志により明治三十一年十一月、覚仲町蓮照寺にて発会）

薬学夜学会（売薬行商人の薫育のため、明治三十二年、市内売薬業者によって設立）

薬業組合矯正会（明治三十二年二月設立）

富山売薬青年会（富山市会の薬学校廃止決議にあたって結成、明治三十三年）

富山売薬同業組合（明治三十四年一月八日発起認可）

富山薬業倶楽部（明治三十四年頃設立）

富山売薬行商会（売薬業者の向上改善を計るために、明治三十五年八月三日、市内梅沢町妙国寺にて設立）

富山売薬協会（中田太七郎等により、売薬同業組合だけに頼っているのは、売薬の発達ははかれないと、明治三十五年九月三十日に設立）

富山薬業研究会（明治三十六年八月一日、富山ホテルにて発会）

その他売薬行商地域別の最寄会など多数あって、協力した。

第十一節 新聞と薬学校

薬学校、薬業学校の設立並びに育成については、富山日報、北陸政論、薬業誌、富山薬報等の新聞が、機に

応じて論説を掲げ、社会を啓蒙し、世論の高揚に努力した。

明治二十九年二月四日、富山日報が「鉄道と売薬」と題する社説をかかげ、売薬研究の急務をといっている。

「富山地方に鉄道敷設成功が眼前に迫っている。富山の主要産物である売薬は、鉄道の敷設とともにますます販売の便を開き、ひとり内地のみだけでなく、海外にも大いに伸びることになる。しかしこの交通運輸の便によって、他県の売薬もまた大いに発展することであろう。したがって、わが富山の売薬が旧慣を守り改善の実をあぐることがなかったならば、他に圧倒せられることになるであろう。と前提し、されば鉄道敷設の進歩に連れて地方の特産も着々品位を高むるの策を講じ同じく行李を担うて売薬の鑑札を持するにもすこぶる敏活の手腕を持せざるべからず、しかしてわが富山売薬家の有力者はすでに大勢を看破し、売薬改善の一着手として薬学校を設立したりといえども、売薬家の父兄いまだ迷夢のさめざる者あるがため進んで入学する者少ない。もちろんにわか多数売薬家の子弟を駆って高尚なる学科を修めしむるは至難のことなれども、まず、手近き学科を修め、製薬のよろしきを得せしむるまでのことは売薬家の責務として是非とも実行すべきなり。もし今日のままにて過ぎ去り、自ら薬を製し薬を売りながらその名称を知るに苦しみ、その効能を説くに窮るがごとき行商人もあるに至らば、交通運輸の便なるにしたがい、とみに恐慌をきたすことなきを求むるも得べからず。今に至って売薬の改善を説き薬学研究の急を説くは十分陳腐のことなりといえどもそのことの陳腐なただけに実際売薬の改善を認むるあたわず、同感の士幸いに努力するところなかるべけんや」

同三十三年三月二十一日、富山日報は、「薬学校を復興すべし」と題し、富山市会の廢校決議をつよく非難している。

同三十三年四月二十四日、富山日報は、「薬業学校をして薬学校たらしむる勿れ」と題し、売薬業者の子弟

の入学を促し、かつ、薬剤師の養成をつよく要望している。

同三十六年四月一日、富山日報は、「売薬と薬業学校」と題し、薬業学校卒業生は、特に製薬の改良に努力せよ。さらに、学校内に、清国内地行商人養成所とでも名づくる夜学部をつくれと要望している。

同四十年二月、富山薬業時報四十七号に井黒義正が「富山薬界の前途」と題する中で、「富山県立薬業学校内の一部に、模範売薬研究所を設けられんことを望む。

1、研究所は薬業学校在勤の職員諸氏ならびに薬学の知識を備え、斯業に実験あるもの若干名をもって組織す。

2、他府県有名売薬はもちろん、欧米の最新売薬を蒐集し、その製剤法より容器、包紙、体裁等に至るまで綿密詳細研究すること。

3、時々斯界の大家ならびに医学博士等の意見をきき、これを参考に供し、実験研究の結果、模範売薬をつくり、もって当業者に示すこと。

4、該所員の手当並びに該所に要する経費等はすべて同業組合または有志の寄附金をもって支弁すること。右の設備の一日も早からんことを切望している。

この時代に刊行された薬業関係雑誌には、次のようなものがある。新富山（明治二十三年創刊）、富山薬学誌（富山県薬剤師会刊、明治二十五年刊）、富山の礎（広貫堂刊、明治二十九年二月十二日創刊）、富山薬報（富山売薬青年会刊、明治三十七年七月五日創刊、明治三十八年四月、富山薬業時報と改題）、薬業誌（薬業誌社刊、明治四十三年三月十四日創刊、富山県立薬業学校の教師であつた高畠清、日野五七郎、高津武治の三氏が編集顧問として活躍した。）